# Ⅱ　結婚する理由、子どもを持つ理由の分析

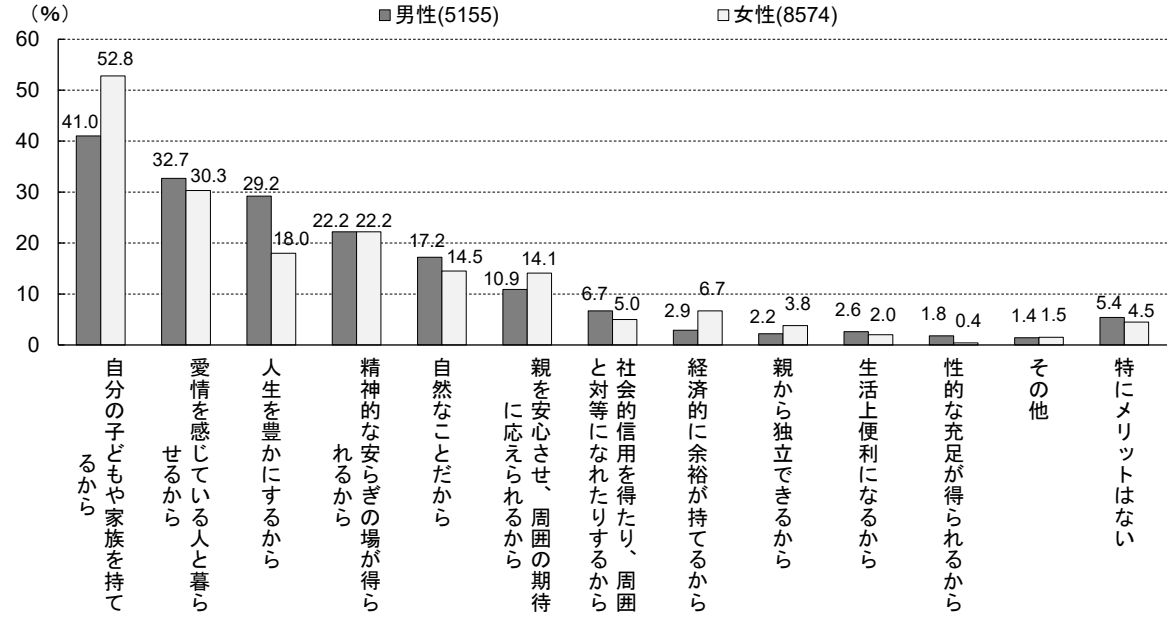
## １．結婚する理由の分析

### （１）結婚する・しない理由の分析

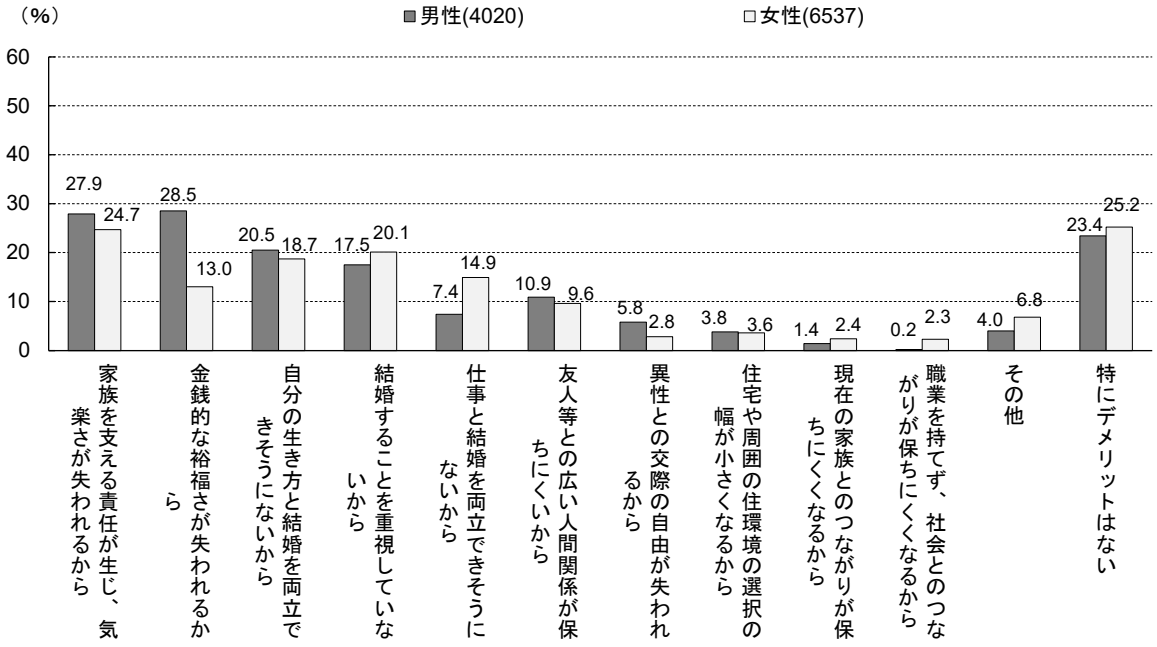
（メリットや肯定的理由を挙げる者が多い）

有配偶状態や未婚者の結婚希望の有無に関わらず、調査対象の全員に対して、結婚する理由・メリットと、結婚しない理由・デメリットを比較した（図Ⅱ－１、図Ⅱ－２）。

図Ⅱ－１　結婚したいと思う（思った）理由や結婚のメリット（複数、第一群）




図Ⅱ－２　結婚するつもりはない（結婚するつもりはなかった）理由や結婚のデメリット（複数、第一群）



そうすると、結婚のメリット・デメリットの「なし」に大きな差がみられた。結婚に「メリットはない」とする者は男女とも約５％である。逆にみると、95%が何らかの肯定的理由があり、結婚にメリットを感じている。

これに対して、結婚に「デメリットはない」は男女とも 25%に近い。つまり、約 75%は、結婚に対して否定的理由やデメリットを挙げている。それでも、「デメリットはない」が「メリットはない」を 20%上回っている。

図Ⅱ－１と図Ⅱ－２は軸のスケールを一致させているため、上のことは否定的理由・デメリットを挙げる者に対して、肯定的理由・メリットを挙げる者の多さから、一目でわかる。

前回調査では、結婚に「メリットがない」は男性で４％、女性３％であり、ほとんど変化はない。一方、「デメリットはない」は、男性で 21%、女性 19%であり、特に女性で「デメリットはない」とする者が増えている。

**（結婚する理由・結婚のメリットを区分して回答者をまとめる）**

図Ⅱ－１の回答を元に、主成分分析を用いてバブルチャートを作成した（９ページの「（３）複数回答の質問におけるバブルチャートの作成」を参照）。そうすると、横軸でみて右側に結婚の「実利的な効用」が表れ、左側には「家族観」と解釈できるような回答が分布している。図から、結婚の実利を重視する者と、家族観的な価値観から結婚を評価する者は異なっており、円の大きさから後者が多いことがわかる。

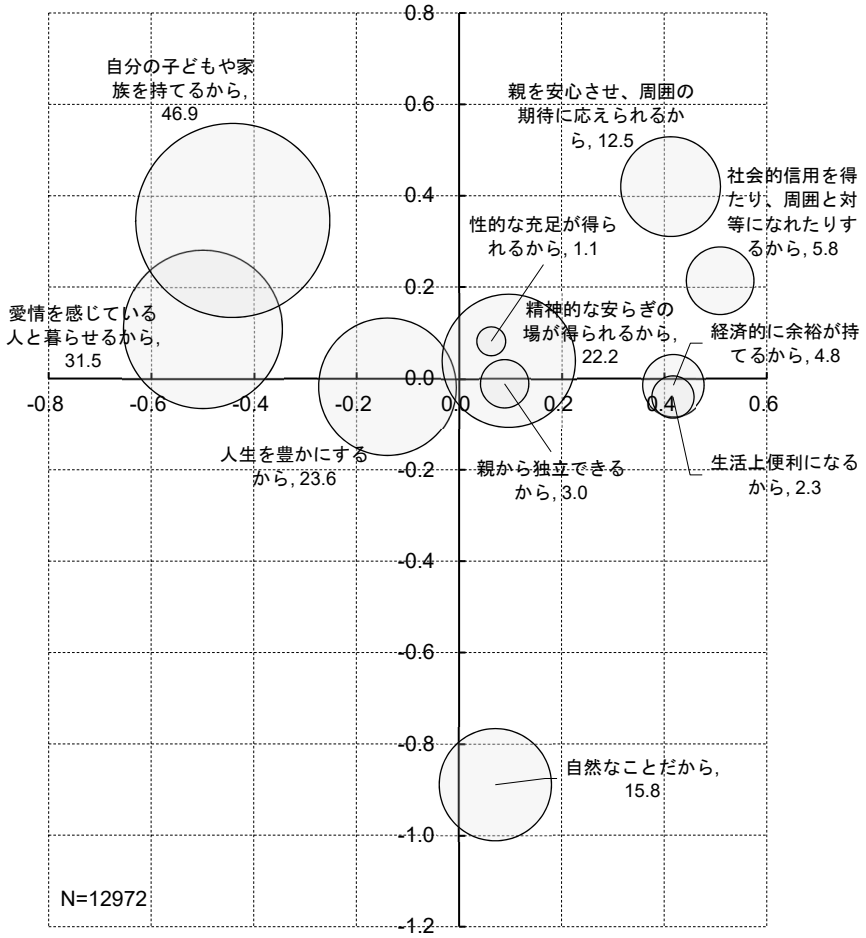
**バブルチャートの作成方法と解釈（詳細）**

- 複数回答の質問の集計結果を図Ⅱ－１や図Ⅱ－２のように表示すると、「使っていない情報」が生じる。それは、回答者が、どのようなパターンで選択肢を選んだかである。Ａの選択肢を選んだ者はＢの選択肢も選ぶ傾向があったり、Ａの選択肢を選んだ者はＣの選択肢には回答しない傾向がみられたりする。そうした回答パターンに基づき、選択肢をまとめると同時に、類似の回答傾向を持つ対象者の群を作ることができる。
- その分析結果の１つが図Ⅱ－３のバブルチャートである。図Ⅱ－１の結婚に対する肯定的理由やメリットを、主成分分析の結果（主成分負荷量）を用いて各選択肢の座標上の位置を決め、円の大きさは回答の割合になっている。
- ２つの軸で形成された座標上で選択肢ＡとＢの距離が近いと回答者はＡとＢを同時に選択する傾向があり、離れた位置にある選択肢は回答者が同時に選択しない傾向がある。
- 分析の結果、選択肢がまとまったなら、そのまとまり方を解釈して、図Ⅱ－１の回答の背後にある要因を推察することができる。同時に、円のまとまりの分布は、回答者の群の形成状況を表しているため、バブルの大きさとまとまった選択肢の内容から、施策の着眼点、ターゲティング、回答の大きさによる重要度の３点を判断する材料が得られる。
- 本報告書では、上記の施策形成上のメリットを踏まえ、理由を尋ねた複数回答の設問について、原則、バブルチャートを作成することとした。また、主成分の選択は結果の解釈の容易さを基本としたが、対立軸として表現できるため、横軸を第２主成分、縦軸を第３主成分としたものが多い。
- なお、通常の主成分分析で行われる横軸・縦軸の意味を解釈した名称付けはせず、平面上の回答のまとまり方の解釈に注力した。例えば、図Ⅱ－３の横軸であれば「結婚の実利的効用と家族を持つことの豊かさ」といった軸の名称が思いつく。それよりも、施策形成では、例えば「家族を持つことの豊かさ」を重視する者が一群を成し、その意味を解釈することの方が、施策の着眼点や戦略の方向性に利用できるコンセプト形成に役立つと考えた。

一方、結婚を「自然なことだから」と考える者は、横軸では中間的にあるものの、縦軸の位置から、実利的効用や家族観のどちらとも異なるという見方ができる。

図Ⅱ－１では、「自分の子どもや家族を持てるから」は男性よりも女性に多く、「人生を豊かにするから」は男性の方が多いという性別による特徴が表れている。しかしながら、バブルチャートでは、２つの回答は比較的に近い位置にあり、図Ⅱ－３には男女の家族観の捉え方の差異（根本は同じ）が表れたものと考えられる。

**図Ⅱ－３　結婚したいと思う（思った）理由や結婚のメリット**
**（バブルチャート、複数、第一群）**




（注）横軸は第２主成分、縦軸は第３主成分

**（結婚しない理由は、結婚による生きにくさ、関係性の自由度の消失等が考えられる）**

結婚に対する否定的な理由や結婚のデメリットを、図Ⅱ－３と同じ方法で区分し、バブルチャートに表した（図Ⅱ－４）。

図をみると、「自分の生き方と結婚を両立できそうにないから」「金銭的な裕福さが失われるから」がとても近接していることがわかる。「家族を支える責任が生じ、気楽さが失われるから」も回答が多く、結婚が何らかの「生きにくさ」を生じさせていると思わせる結果となった。

「結婚することを重視していないから」という否定的な結婚観を持つ者は、上の「生きにくさ」

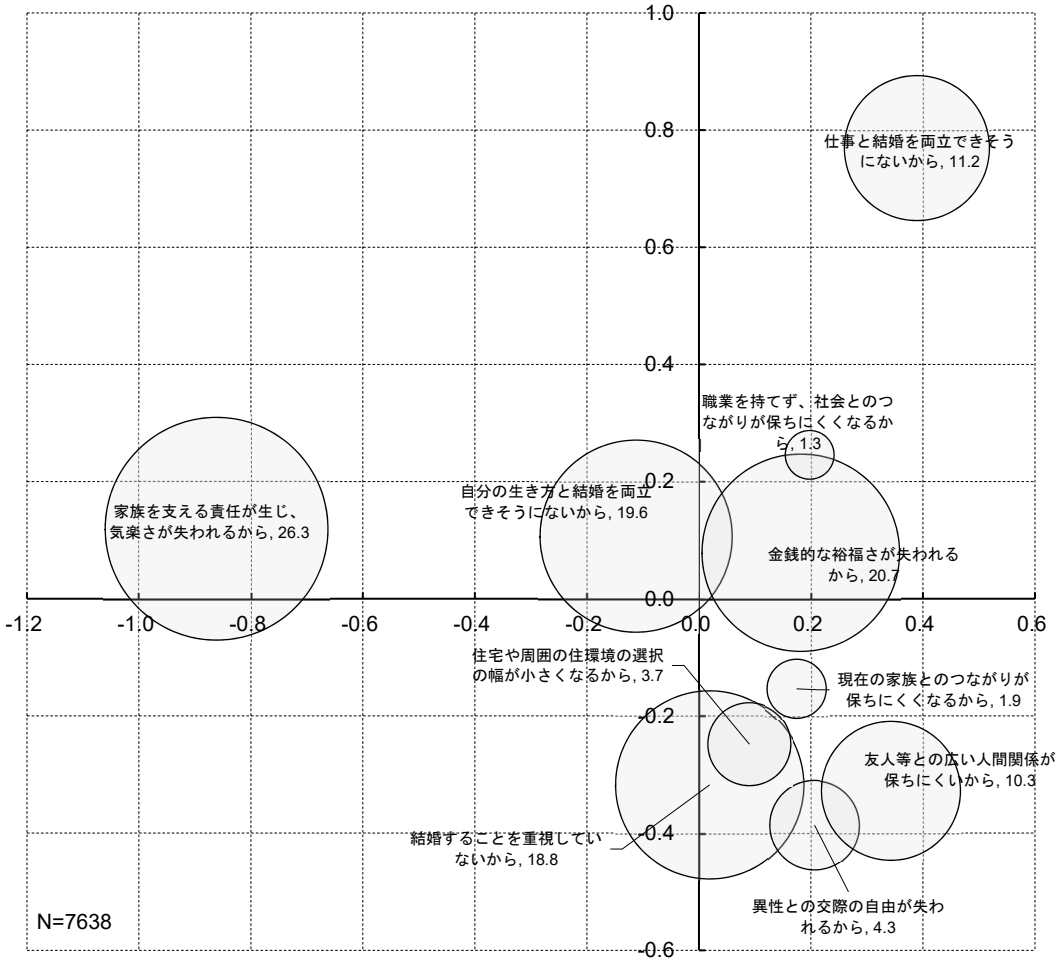
とはやや離れており、結婚による特定のパートナーよりも、友人や家族との関係、異性との交際の自由度、さらに住環境選択の自由度に関わる選択肢と近接している。「結婚することを重視していないから」は、何らかの関係性の自由度に対する志向と結びついているように考えられる。

縦軸をみると、「仕事と結婚を両立できそうにないから」は全体の 11%であるものの、上の２つからの独立性が高い。

図Ⅱ－２によると、結婚による「生きにくさ」と解釈した３つの回答は男性に多い。特に「金銭的な裕福さが失われるから」の男女差が大きい。一方、「結婚することは重視していないから」は女性で２番目に多い回答になっている。また、「仕事と結婚を両立できそうにないから」は女性では 15%に上る。

なお、図Ⅱ－１の「人生を豊かにするから」「自然なことだから」、図Ⅱ－２の「結婚することを重視しないから」は、近年の価値観の変化を受け、今回調査から導入したものであり、前回とは比較はできない。

**図Ⅱ－４　結婚するつもりはない（結婚するつもりはなかった）理由や結婚のデメリット（バブルチャート、複数、第一群）**




（注）横軸は第２主成分、縦軸は第３主成分

（当分あるいは一生、結婚するつもりはない者の回答）

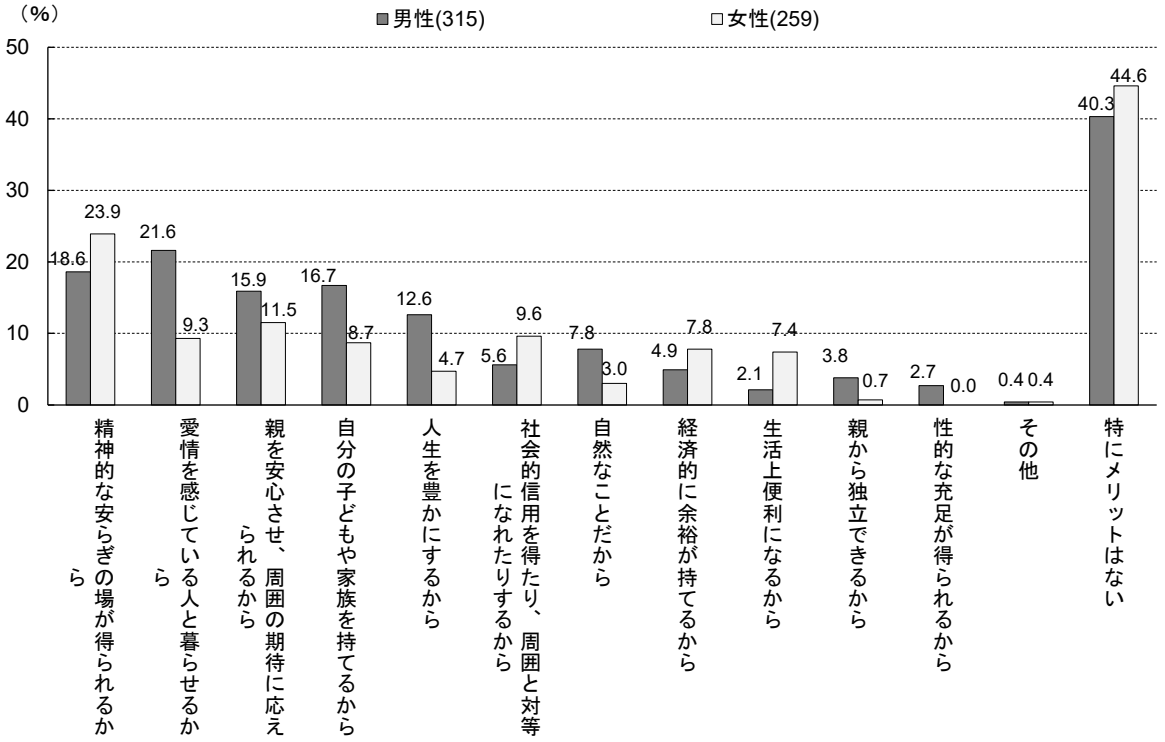
結婚の理由やメリット・デメリットに関わる問題点を明確にするため、結婚希望について「相手が見つかっても、当分、結婚するつもりはない」と「一生、結婚するつもりはない」と回答した者に絞って集計を行った（図Ⅱ－５、図Ⅱ－６）。

肯定的理由・メリットに関する全体集計（図Ⅱ－１）と図Ⅱ－５の違いは、「メリットはない」の多さである。「メリットはない」は、図Ⅱ－５では、男性で 40%、女性では 45%とほぼ半数に上る。

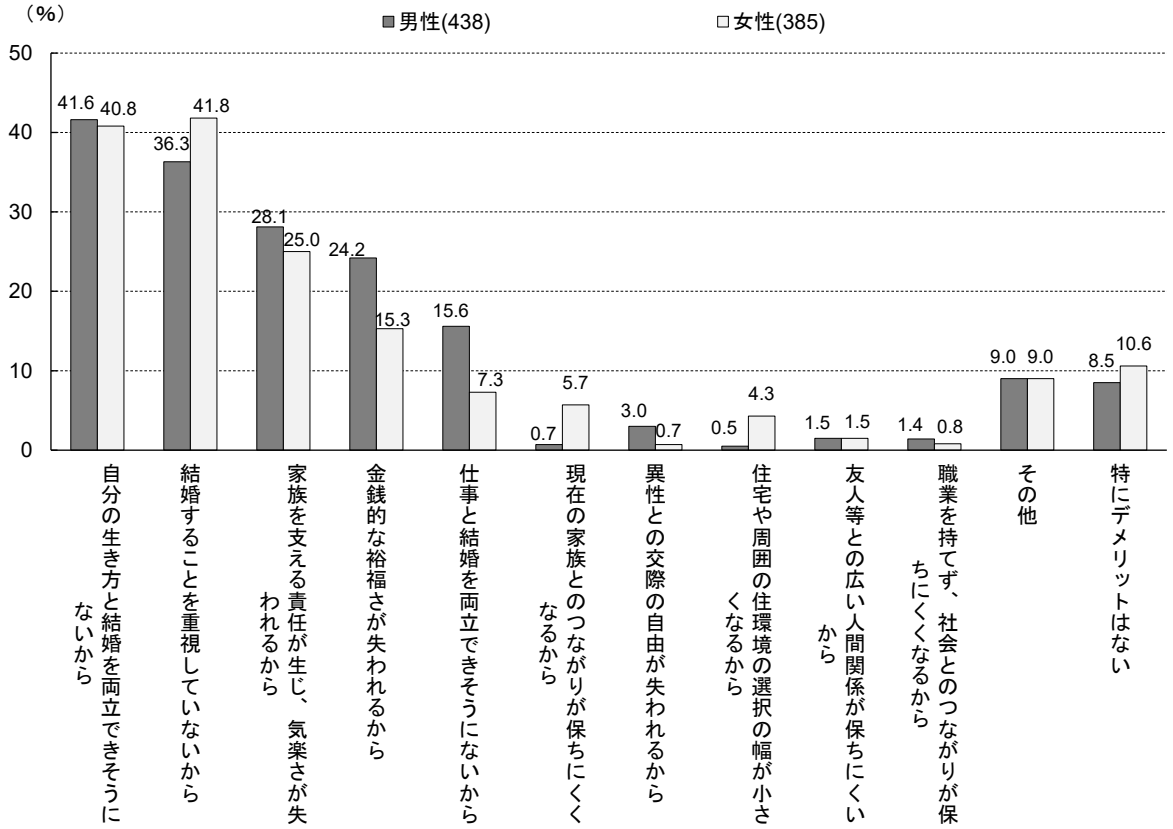
否定的理由・デメリットでは、「自分の生き方と結婚を両立できそうにないから」（男性 42%、女性 41%）と「結婚することを重視していないから」（男性 36%、女性 42%）が際立って多くなる（図Ⅱ－６）。前者は、図Ⅱ－４では「生きにくさ」と解釈した選択肢の１つであり、結婚と、ライフスタイルやライフコースとの広い意味での「両立」の問題である。後者は、結婚による特定のパートナーと暮らすことに対する価値観等が影響を及ぼしていると考えられる。

これらの２つの選択肢に的を絞って年齢階層別に集計を行うと、「結婚することを重視していないから」は、年齢とともに回答が増加する傾向がある（図Ⅱ－７）。次章の年齢要因でみるように、年齢上昇に伴う結婚希望の実現が難しいという予想が結婚観に影響を及ぼしている可能性が考えられる。

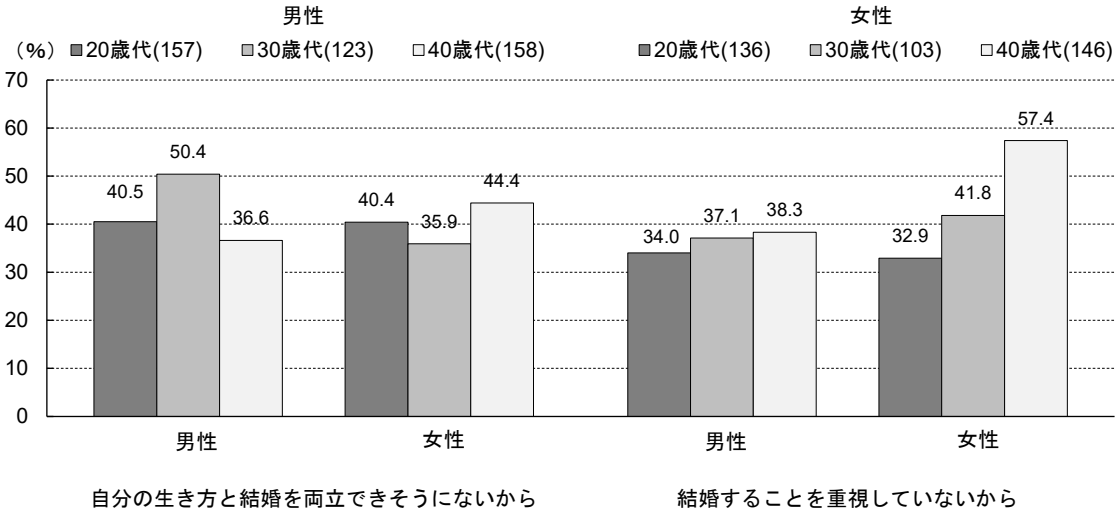
図Ⅱ－５　結婚したいと思う（思った）理由や結婚のメリット
（当分結婚するつもりはない・一生結婚するつもりはない、複数、第一群）



図Ⅱ－６　結婚するつもりはない（結婚するつもりはなかった）理由や結婚のデメリット
（当分結婚するつもりはない・一生結婚するつもりはない、複数、第一群）




図Ⅱ－７　結婚するつもりはない（結婚するつもりはなかった）理由や結婚のデメリット
（当分結婚するつもりはない・一生結婚するつもりはない、複数、第一群）



## （２）理想の結婚年齢がある理由の分析

### （年齢要因が大きく影響している）

次章の分析では、未婚者・既婚者の両方で、男性では 50%弱、女性では 60%強の者で理想の結婚年齢を持っている（図Ⅲ－１）。

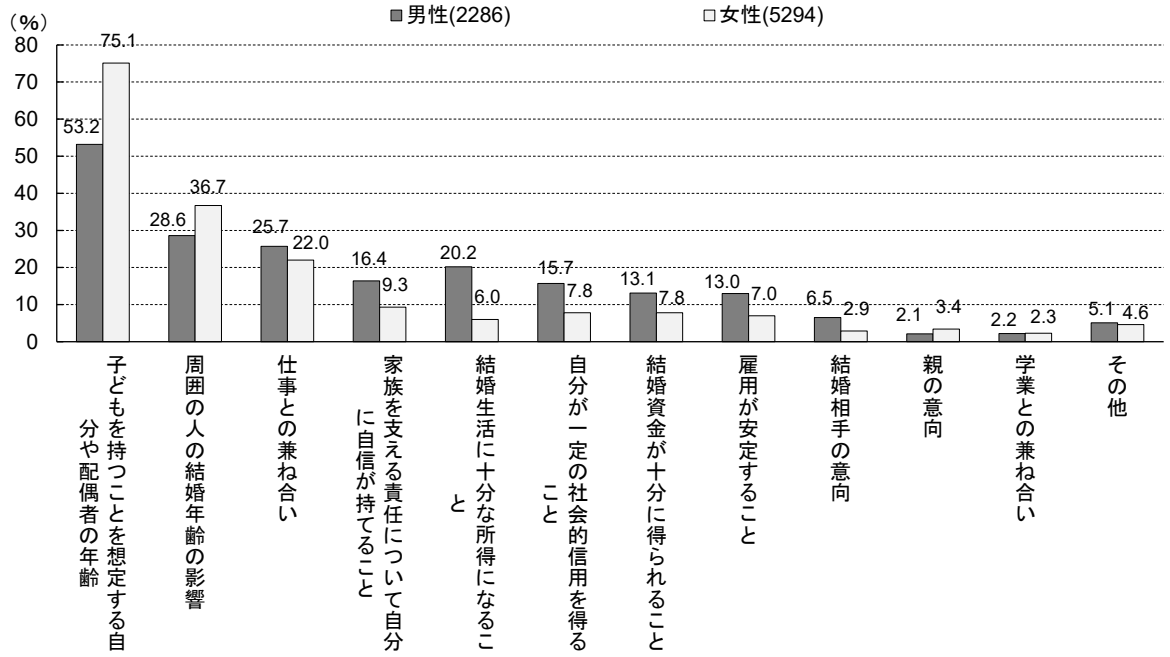
そこで、理想の結婚年齢がある（あった）者を対象に、その理由を把握した（図Ⅱ－８）。女性では「子どもを持つことを想定する自分や配偶者の年齢」に回答が集中しており、75%に上る。男性でも 53%に上り、他に比べ際立って多い。女性は妊娠し出産する自分の年齢、その際の健康や身体的な負担、あるいは子育ての負担を考慮した選択と考えられる。男性も、パートナーの健康面や出産の負担のほか、子育てに関わる経済的負担を考慮した可能性がある。いずれにせよ、結婚・出産・子育てに関わる年齢要因が、理想の結婚年齢を生じさせている最大の理由になっている。

男女を合わせた回答をバブルチャートに表すと、結婚に必要な所得、雇用の安定性、仕事との両立など経済面と、子どもを持つときの自分や配偶者の年齢の問題が、横軸を形成しており、回答者の傾向が異なることがわかる（図Ⅱ－９）。

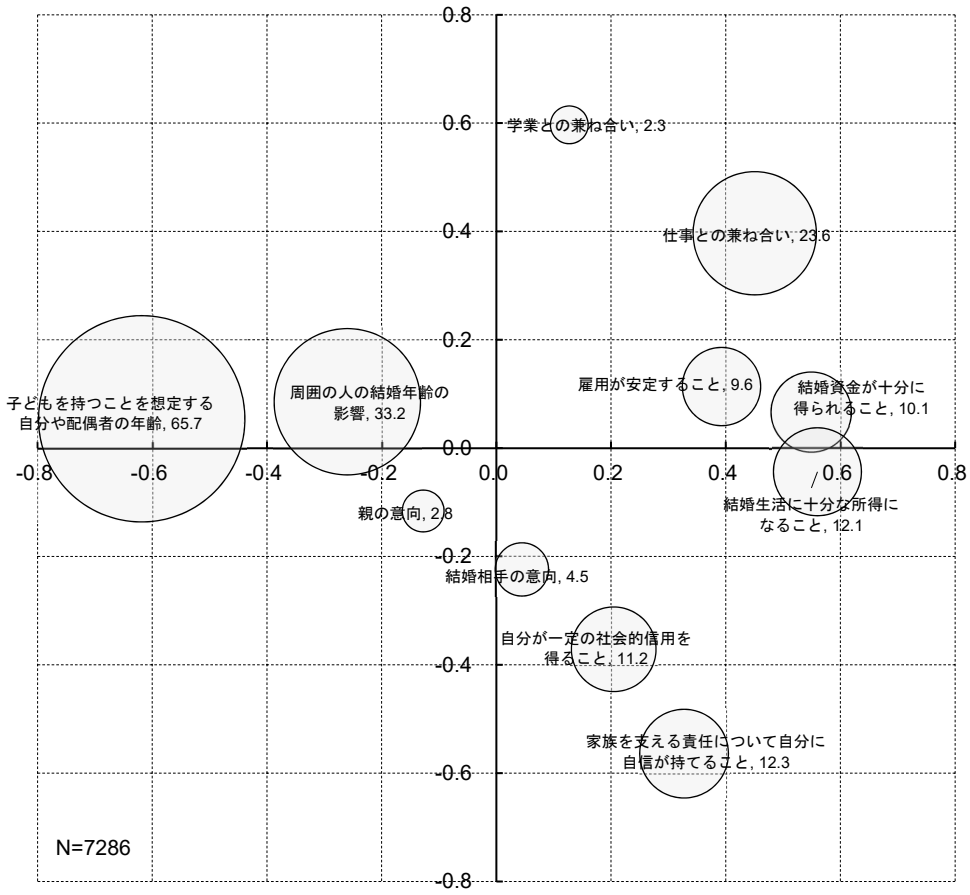
「子どもを持つことを想定する自分や配偶者の年齢」は「周囲の人の結婚年齢の影響」や「親の意向」と比較的近く、年齢に対する意識は周囲から影響を受けていることが推察される。結婚年齢にネットワーク効果（身近な者から影響を受ける効果）があることを示していると考えられ、理想の年齢での結婚支援が成果を上げたときには社会的波及性が期待できる。

バブルチャートの縦方向は、回答はわずかであるが「学業との兼ね合い」と「家族を支える責任について自分に自信が持てること」が対立軸を形成している。学生だと家族は支えられないという自然な結果が表れている。

図Ⅱ－８　理想とする結婚年齢がある（あった）理由
（理想とする結婚年齢がある（あった）者、複数、第一群）



図Ⅱ－９　理想とする結婚年齢がある（あった）理由
（理想とする結婚年齢がある（あった）者、バブルチャート、複数、第一群）




（注）横軸は第１主成分、縦軸は第３主成分

## （３）結婚希望が実現できない理由の分析

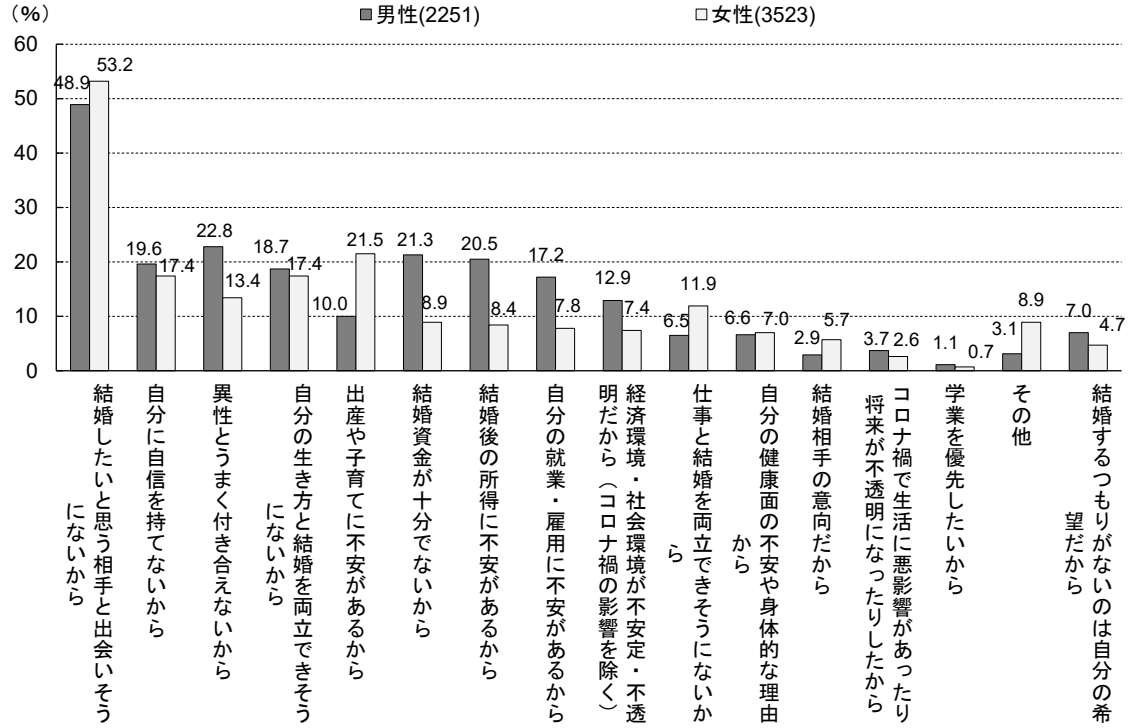
### （結婚希望が実現できない理由は、出会い、所得、両立の３つ）

次に、「理想の年齢よりも遅くなりそう」と「結婚できそうにない」といった結婚の希望が実現できないとする者を対象に、その理由を把握した。（図Ⅱ－１０）

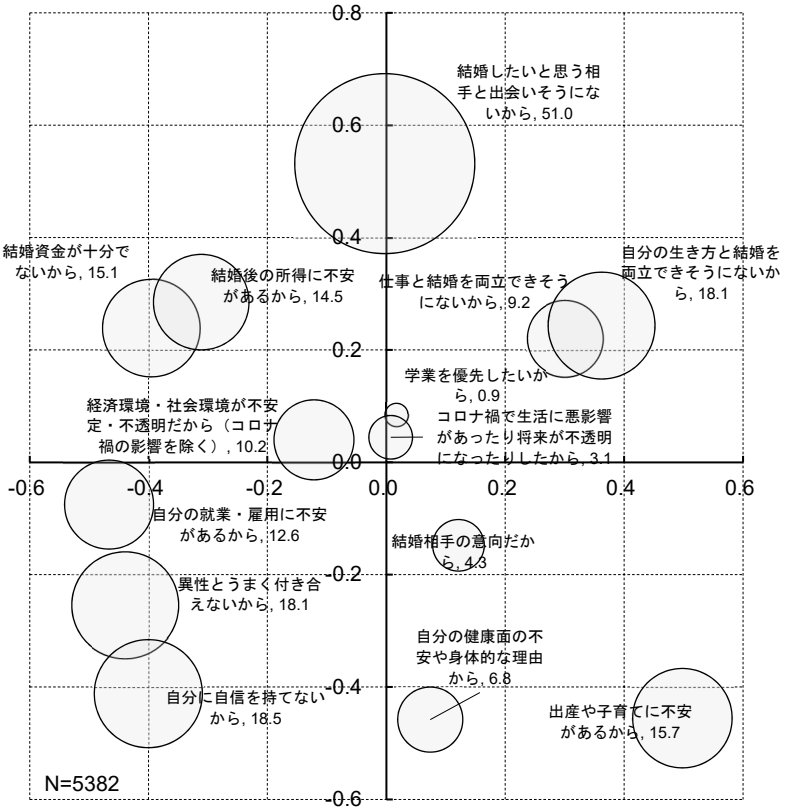
回答を詳しくみると、結婚希望の「結婚するつもりはない」と、実現予想で把握した「結婚できそうにない」と「結婚するつもりはない」の間に回答の揺れがみられる。予想で「結婚できそうにない」と回答しつつ、希望では「結婚するつもりはない」などである。そこで、予想で「結婚するつもりはない」と回答した者も含めて集計を行った。

男女とも、「結婚したいと思う相手と出会いそうにないから」が際立って多く、約 50%を占める。この他では、男性では、結婚資金の不足（21%）、結婚後の所得の不安（21%）、就業・雇用の不安（17%）を挙げる者が多い。女性では、出産や子育ての不安（22%）、仕事と結婚との両立の問題（12%）などが男性よりも回答が多い。

図Ⅱ－１０　「理想の年齢よりも遅くなりそう（もっと早く結婚したかった）」「結婚できそうにない（と思っていた）」「結婚するつもりはない（なかった）」と思う理由（複数、第一群）




図Ⅱ－１１　「理想の年齢よりも遅くなりそう（もっと早く結婚したかった）」「結婚できそうにない（と思っていた）」「結婚するつもりはない（なかった）」と思う理由（バブルチャート、複数、第一群）




（注）横軸は第２主成分、縦軸は第３主成分

結婚希望の実現ができない理由（「結婚するつもりはない」含む）についてバブルチャートを作成すると、回答はいくつかに分かれる（図Ⅱ－１１）。

１つ目は、最も回答が多い「結婚したいと思う相手と出会いそうにないから」である。やや距離はあるが、周辺には、結婚後の所得の不安や結婚資金の不足が位置している。また、生き方や仕事と結婚との両立の問題も比較的近い。これらを結婚したいと思う相手と出会いそうにないことの理由と捉えることもできる。

「結婚したいと思う相手と出会いそうにないから」とは離れた位置に「自分に自信を持てないから」と「異性とうまく付き合えないから」が位置しており、まとまりができている。これらに就業・雇用の不安が隣接している。

## ２．子どもを持つ理由の分析

### （１）子どもが欲しい・欲しくない理由の分析

**（子どもが欲しい理由も実利的効用と自然感に分かれる）**

子どもが欲しいと思う理由は、男女とも「生活が楽しく心が豊かになるから」が最も多く、半数を上回る（図Ⅱ－１２）。

この他では「子どもが好きだから」「好きな人の子どもを持ちたいから」などが続く。こうした中で「自然なことだから」が男女とも 30%に上る。結婚の理由では「自然なことだから」が15%前後であり、それに比べほぼ２倍の多さになっている。

バブルチャートで表すと、「生活が楽しく心が豊かになるから」は、「夫婦関係を安定させるから」や「老後の支えになるから」と近く、どちらかと言えば、実利的な効用の面があると考えられる（図Ⅱ－１３）。

一方、「子どもが好きだから」と「好きな人の子どもを持ちたいから」は隣接しており、横軸でみると「自然なことだから」と近い。感覚的な子どもを持つことの自然感が背後にあることも考えられる。

**（子どもを持つかどうかでは仕事と子育てとの両立は経済問題）**

子どもが欲しくない理由や、子どもが欲しいとしても１人である理由について把握した（図Ⅱ－１４）。男女で差がみられ、男性では「所得に不安があるから」（43%）と「子育てや教育に、お金がかかりすぎるから」（37%）といった経済面の回答が多い。後者は、女性でも最も多い回答である（29%）。

加えて、女性では、「子育てに自信がないから」（27%）、「仕事と子育てを両立できそうにないから」（26%）を挙げる者が多い。これらの回答は男性でも 23%と 17%であり、女性だけの理由ではない。

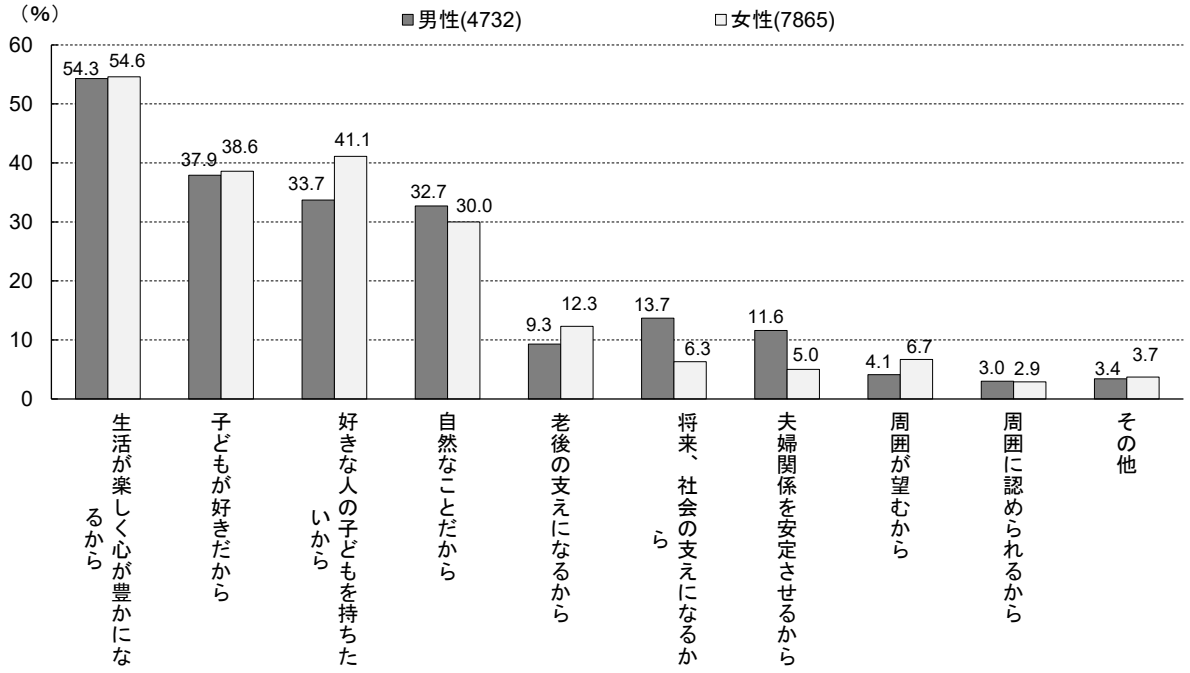
バブルチャートで表すと、「子育てや教育にお金がかかりすぎるから」を中心に大きなまとまりができている（図Ⅱ－１５）。その下方には、所得や就業・雇用の不安が位置しており、経済問題が子どもを持たない大きな理由になっていることがわかる。

また、「子育てや教育にお金がかかりすぎるから」と「仕事と子育てを両立できそうにないから」が隣接していることが注目される。仕事と子育てとの両立の問題はジェンダーギャップや女性活躍のみならず、家計にとって経済的問題であることが明らかである。

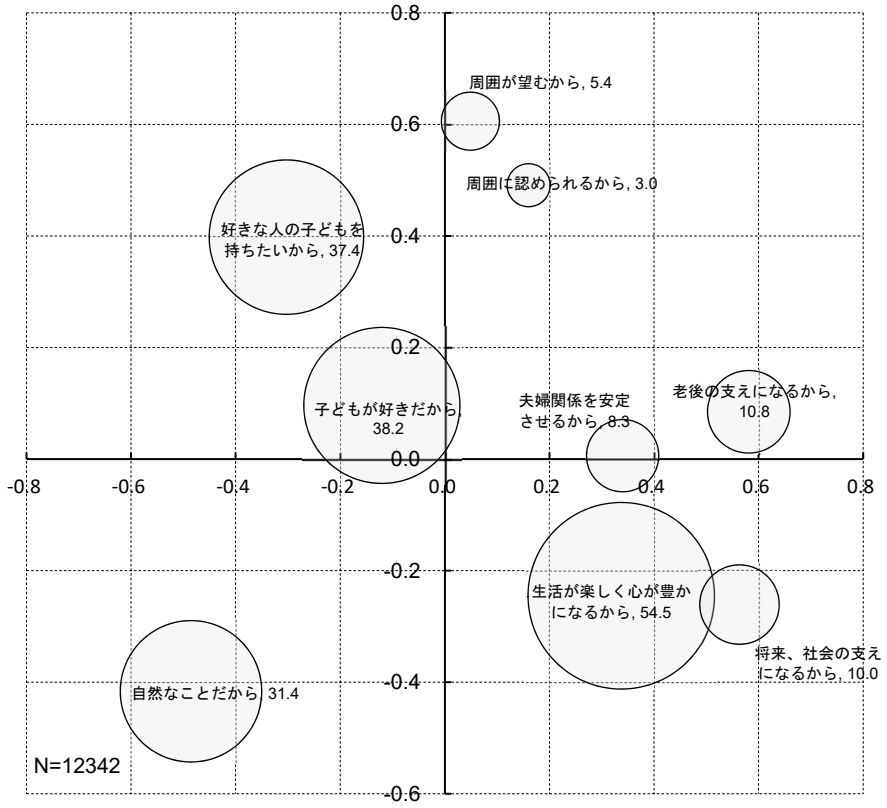
このほか、「子育てや教育にお金がかかりすぎるから」の上方には、「子どもを持つ積極的な意味が見出せないから」「子どもを養う責任が増え、気楽さが失われるから」「自分の生き方と子育てを両立できそうにないから」などがまとまっている。お金がかかるというデメリットに、子どもを持つことに対する否定的な価値観が加わり、子どもを持たないことの理由として強固さが感じられる。

最後に、「子育てに自信がないから」と「妊娠や出産に対して自信がないから」が離れた位置にあり、上とは回答した者が異なっていることがわかる。

図Ⅱ－１２　子どもが欲しいと思う（思った）理由（複数、第一群）

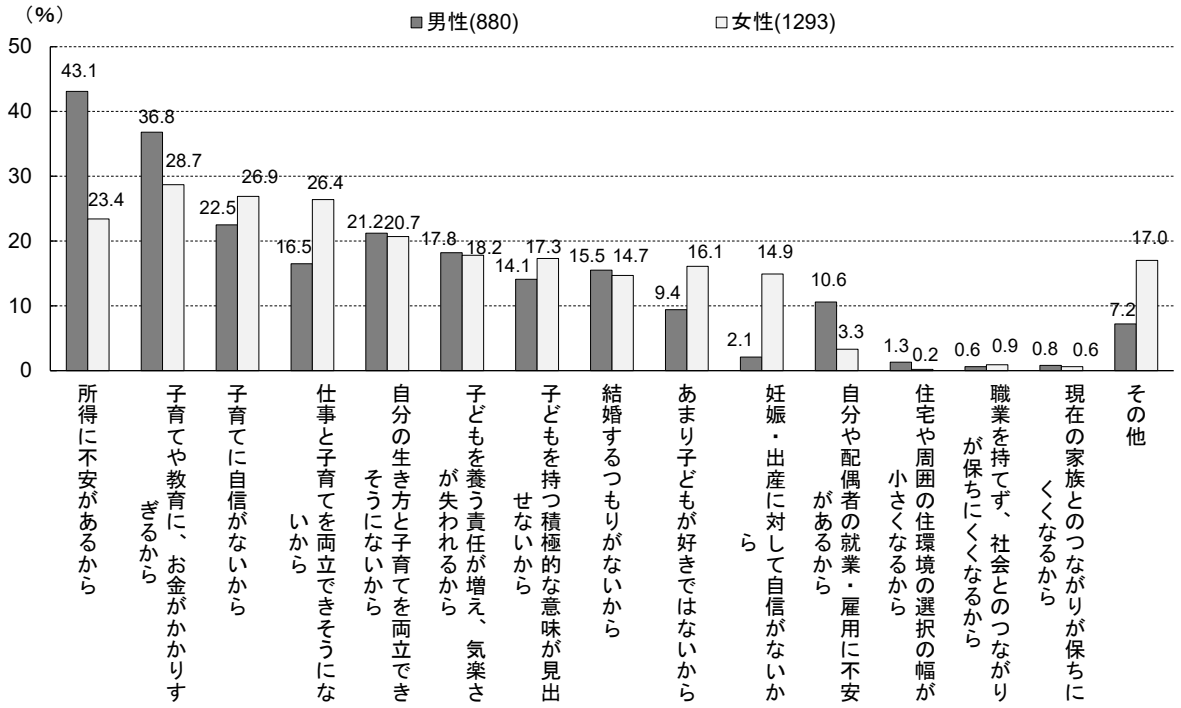



図Ⅱ－１３　子どもが欲しいと思う（思った）理由（バブルチャート、複数、第一群）

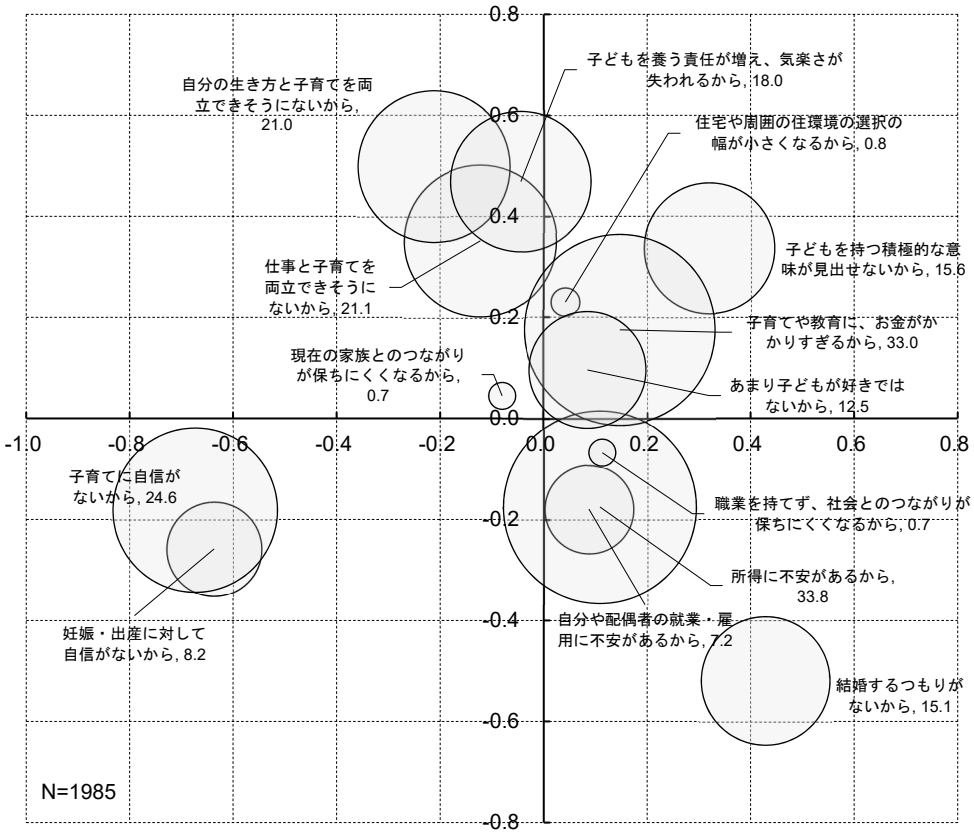



（注）横軸は第２主成分、縦軸は第３主成分

## 図Ⅱ－１４　子ども欲しくない、または希望する子どもの数が１人である理由（複数、第一群）




## 図Ⅱ－１５　子どもは欲しくない、または希望する子どもの数が１人である理由（バブルチャート、複数、第一群）




（注）横軸は第２主成分、縦軸は第３主成分

## （２）希望する子ども数が実現できない理由の分析

### （希望する子ども数が持てない最大の理由の経済問題）

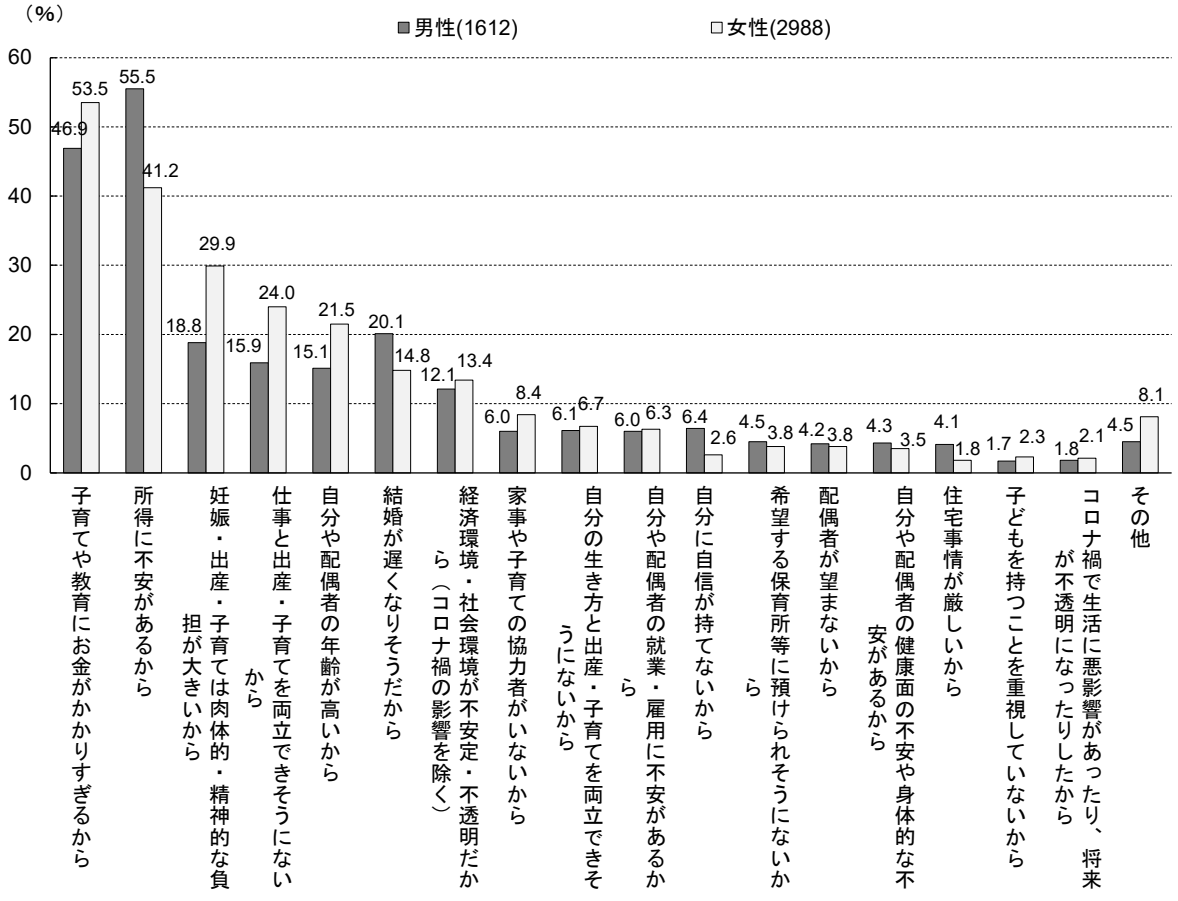
希望する子ども数が「２人」で持てると思う子ども数が「１人」、希望する子ども数が「１人」で持てると思う子ども数は「子どもを持つ予定はない」など、希望する子ども数よりも、現実に持てると思う子ども数が少ないとする者に対して、その理由を尋ねた。これは、希望する子ども数が実現できない理由である。

その結果、男女とも「子育てや教育にお金がかかりすぎるから」と「所得に不安があるから」がセットになって際立って回答が多い（図Ⅱ－１６）。

この他では、女性で「妊娠・出産・子育ては肉体的・精神的な負担が大きいから」（30%）、「仕事と出産・子育てを両立できそうにないから」（24%）、「自分や配偶者の年齢が高いから」（22%）からといった理由が多く、男性に対する特徴になっている。なお、これらの回答は男性でも 15%を超えている。

また、「結婚が遅くなりそうだから」は、男性で 20%、女性では 15%あり、結婚年齢が、持てると思うことも数に影響を及ぼしている。

図Ⅱ－１６　持てると思う子ども数が希望する子ども数より少ない理由
（持てると思う子ども数が希望する子ども数より少ない者、複数、第一群）

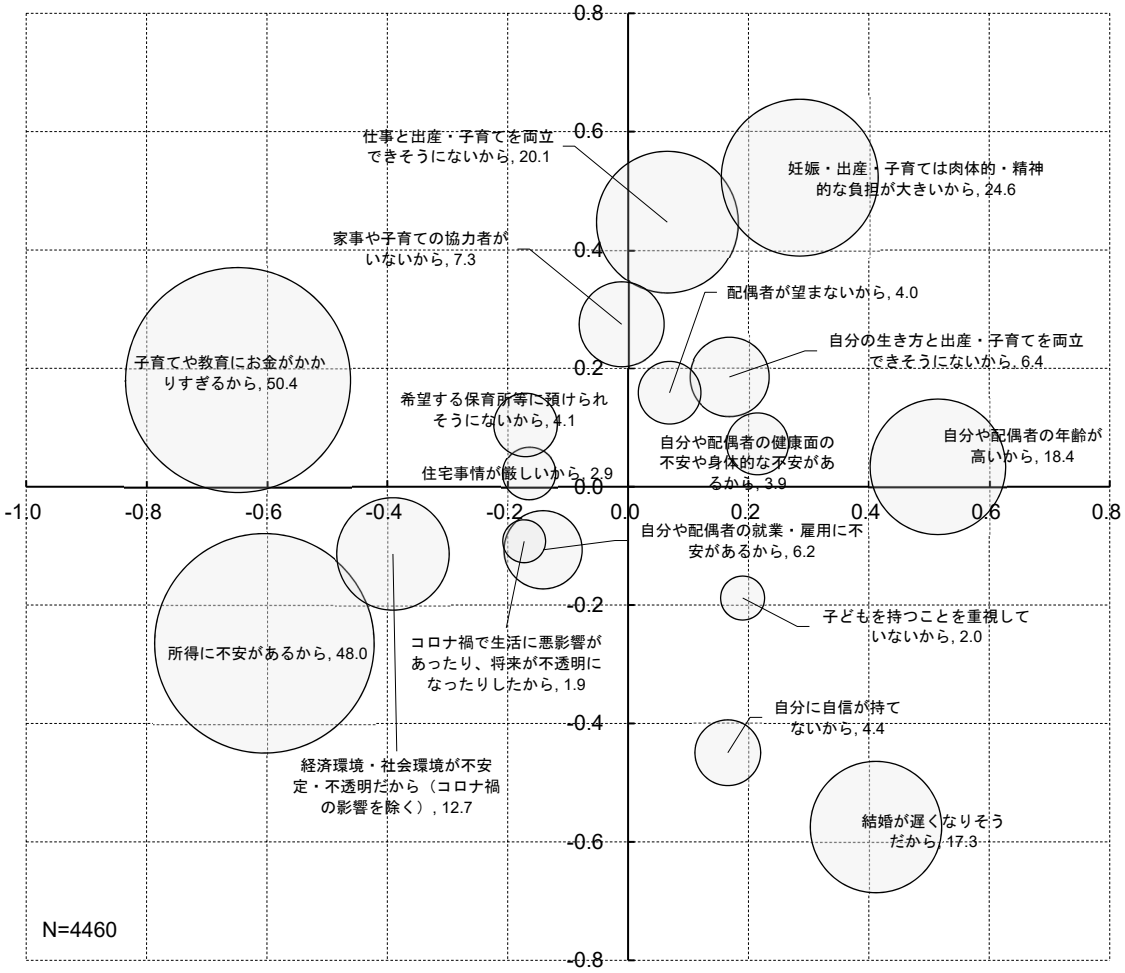


バブルチャートでは、横軸の左側に、子育てや教育の費用負担と所得の不安がまとまっている（図Ⅱ－１７）。就業・雇用の不安もこれらに近い。「子どもが欲しくない」理由を表したバブルチャート（図Ⅱ－１５）と同様である。これらの経済面の理由に加えて、回答はわずかであるが、希望する保育所等に預けられないことや住宅事情の厳しさも比較的に近い位置にある。

「子どもが欲しくない」理由との差異は、肉体的・精神的な負担、自分や配偶者の年齢の高さ、協力者がいないことが第Ⅰ象限にまとまっていることである。経済面以外の負担がまとまっていると解釈できるが、仕事と出産・子育てとの両立の問題はこのグループとなっている。子どもが欲しくない理由と、子どもが欲しいけれども実現できない理由の差異の１つである。

「結婚が遅くなりそうだから」は未婚者の回答だと考えられ、有配偶者の「自分や配偶者の年齢が高いから」とは離れた位置にある。

**図Ⅱ－１７　持てると思う子ども数が希望する子ども数より少ない理由**
**（持てると思う子ども数が希望する子ども数より少ない者、バブルチャート、複数、第一群）**




（注）横軸は第１主成分、縦軸は第２主成分

（子育て世帯では経済的負担が大きいものの、肉体的・精神的負担も響いている）

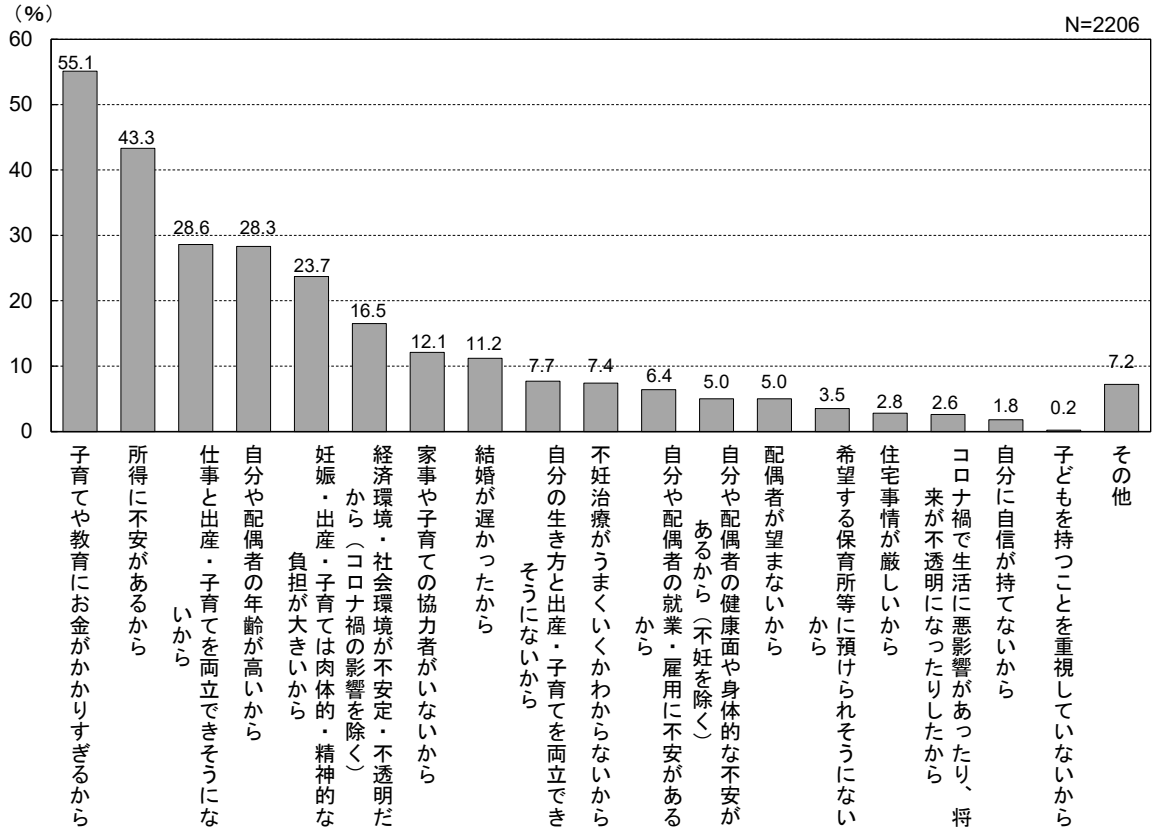
現在、１人以上の子ども（０歳から小学校３年生まで）を育てている子育て世帯に対して、希望する子ども数よりも、持てると思う子ども数が少ない理由を尋ねた。これは、子育てを現在経験している世帯に限った子ども数の希望が実現できない理由である。

その結果、「子育てや教育にお金がかかりすぎるから」が 55%、その裏返しでもある「所得に不安があるから」が 43%に達し、他の理由に比べて際立って回答が多い（図Ⅱ－１８）。

これらに、「仕事と出産・子育てを両立できそうにないから」(29%)、「自分や配偶者の年齢が高いから」(28%)、「妊娠・出産・子育ては肉体的・精神的な負担が大きいから」(24%) などが続いている。

バブルチャートを作成すると、子育てや教育にお金がかかることと所得の不安が近接し、「経済環境・社会環境が不安定・不透明だから」と一緒に一群を形成している（図Ⅱ－１９）。「自分や配偶者の就業・雇用に不安があるから」「住宅事情が厳しいから」「希望する保育所等に預けられそうにないから」も比較的近く、第３象限の周辺にあるこれらの理由が一群を形成し、希望する子ども数が実現できない子育て世帯の「経済問題」になっていること考えられる。また、これらの「経済問題」にコロナ禍の悪影響も加わるが、回答割合は小さい。

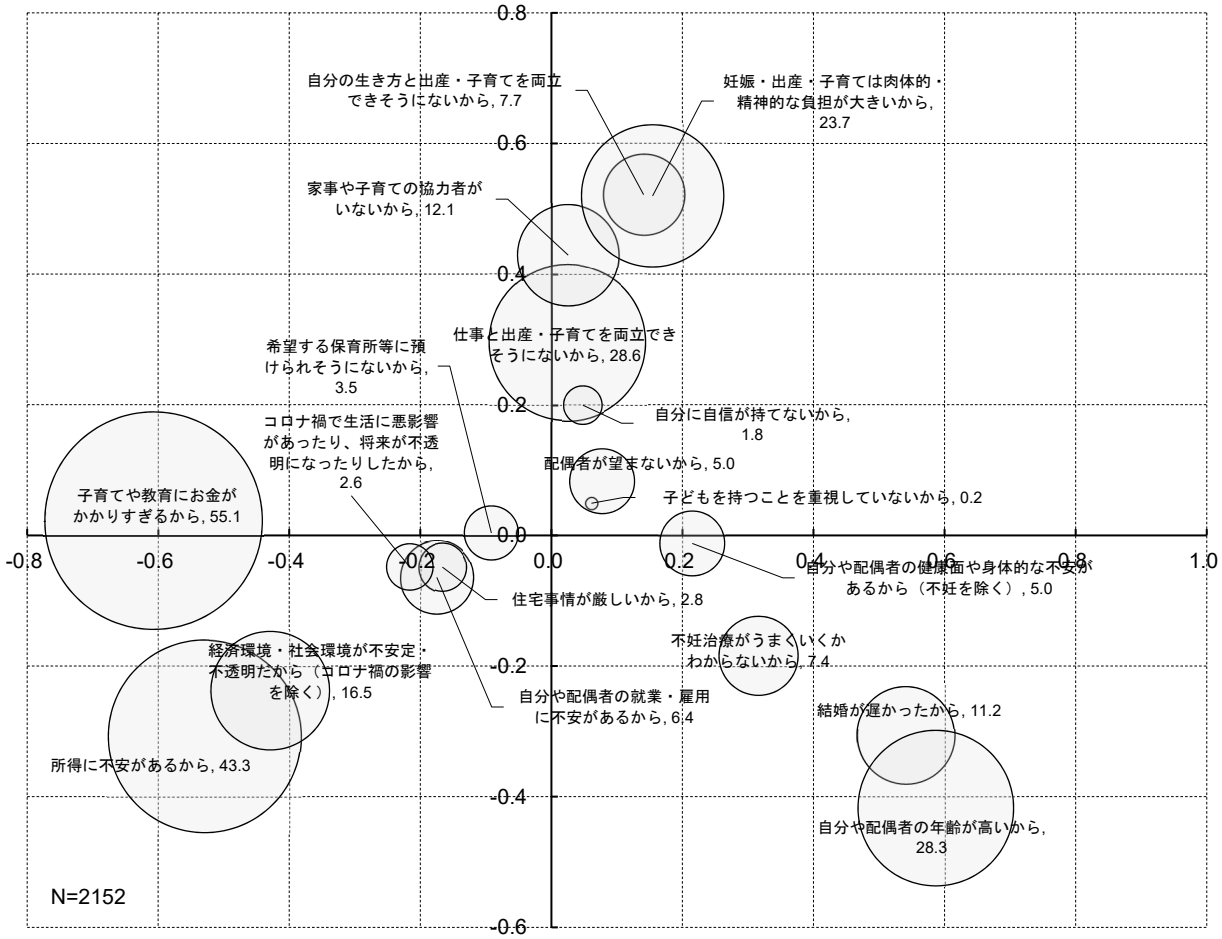
図Ⅱ－１８　持てると思う子ども数が希望する子ども数より少ない理由
（持てると思う子ども数が希望する子ども数より少ない者、複数、第二群）



次に、妊娠・出産・子育ての肉体的・精神的負担、家事や子育ての協力者がいないこと、仕事と出産・子育てとの両立の難しさが重なり合っている。仕事との両立の問題は、子育てをしている世帯にとっては「肉体的・精神的負担」の問題という側面が強いと考えられる。「家事や子育ての協力者がいないから」がまとまりの中に含まれており、子育て世帯にとって、出産・子育ての肉体的・精神的な負担は、仕事との両立の容易さや、配偶者等の協力者の存在に左右されていると考えられる。

最後に、「自分や配偶者の年齢が高いから」と「結婚が遅かったから」は重なり合い、理解のしやすいまとまり方をしている。近い位置に「不妊治療がうまくいくかわからないから」があり、晩婚化が希望する子ども数の実現に影響に及ぼしていることがわかる。

**図Ⅱ－１９　持てると思う子ども数が希望する子ども数より少ない理由**
**（持てると思う子ども数が希望する子ども数より少ない者、バブルチャート、複数、第二群）**




（注）横軸は第１主成分、縦軸は第２主成分

### （３）希望する子ども数が実現できるとしても問題になりそうなこと

**（多くの子育て世帯が経済問題の悪化を懸念している）**

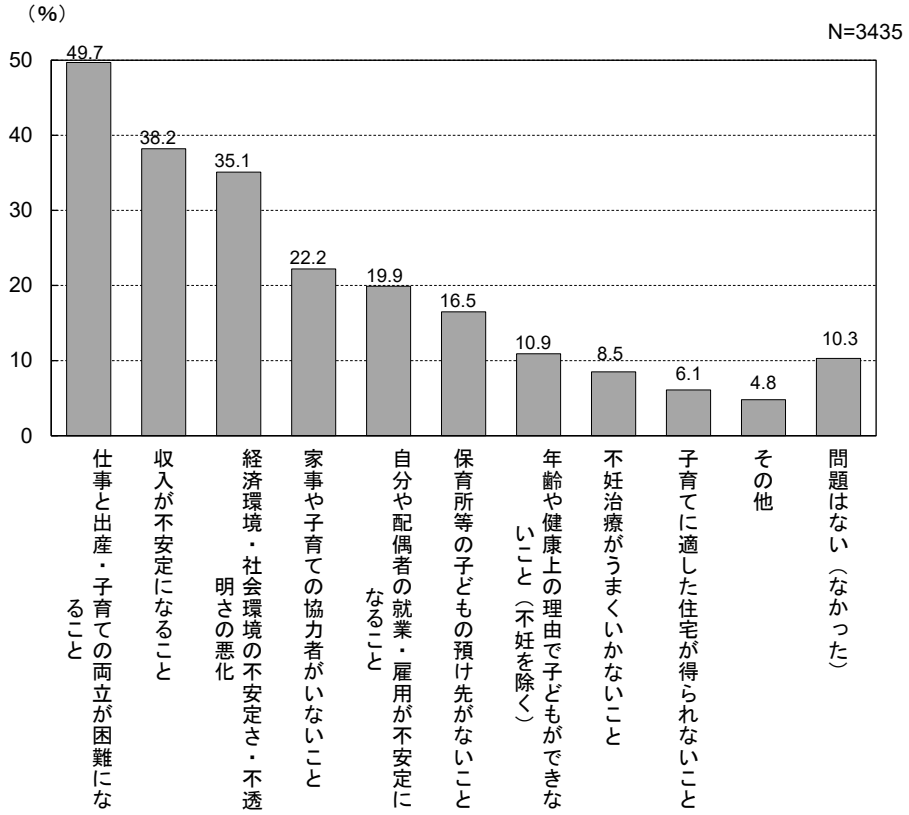
希望する子ども数のとおり子どもを持てると予想している子育て世帯に、持てると思う子ども数を実現するに当たって問題となりそうなこと（問題となったこと）を尋ねた（図Ⅱ－２０）。この回答は、予想子ども数と合計特殊出生率の間に差が生じる要因の１つになることも考えられ、注目される。

「仕事と出産・子育ての両立が困難になること」が最も多く、半数を占める（図Ⅱ－２０）。この他では、「収入が不安定になること」（38%）、「経済環境・社会環境の不安定さ・不透明さの悪化」（35%）が多い。子育て世帯を取り巻く環境が、現在の見通し以上に悪化する可能性のあることが懸念されており、また、これまでにそういう状況が実際に起こっていたことを示している。また、回答の多い３つはいずれも主に経済的な問題である。

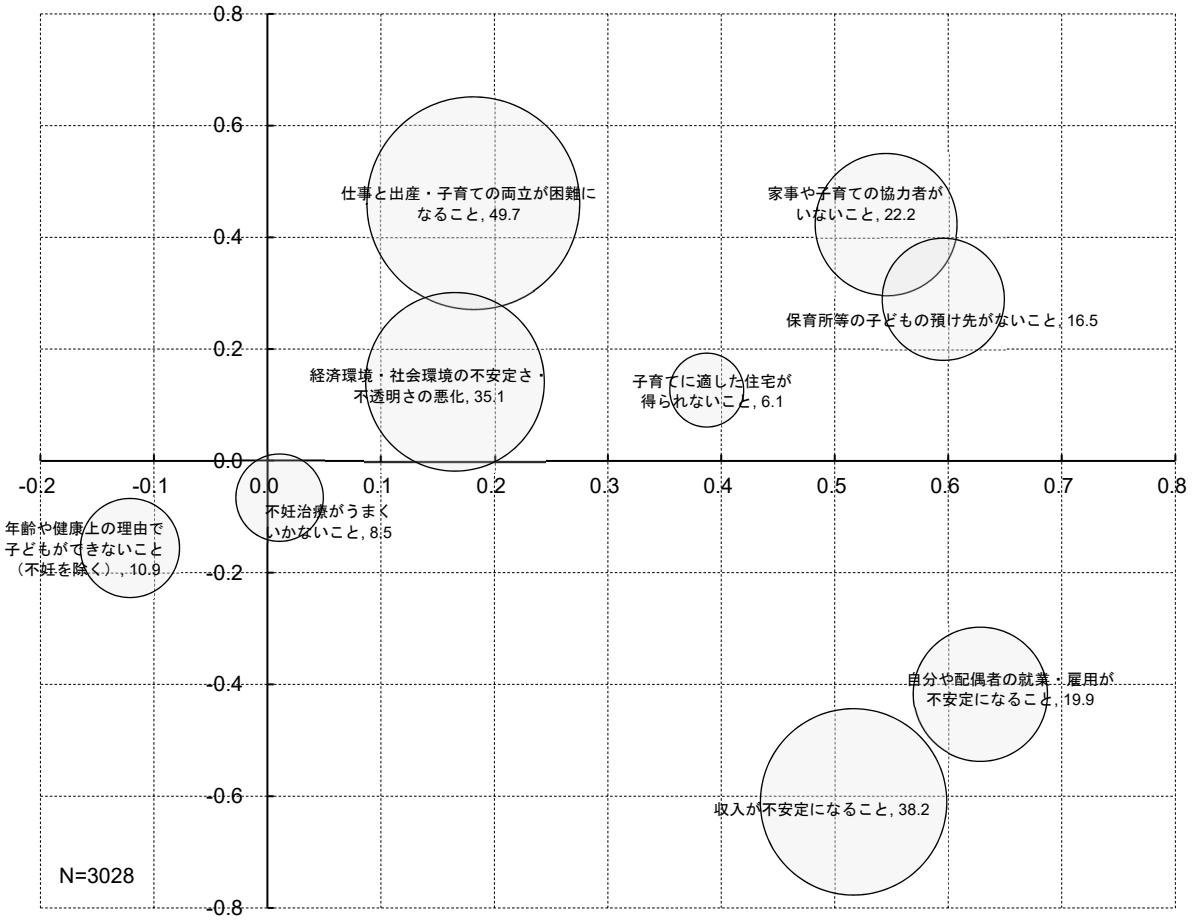
バブルチャートで確認すると、経済問題として捉えられる理由が、２つの大きなまとまりになっている（図Ⅱ－２１）。１つは、仕事と出産・子育てとの両立の困難化と経済環境・社会環境の不安定化・不透明化であり、もう１つは、収入の不安定化と就業・雇用の不安定化である。

この他では、「保育所等の子どもの預け先がないこと」と「家事や子育ての協力者いないこと」がまとまり、「年齢や健康上の理由で子どもができないこと」と「不妊治療がうまくいかないこと」が近い位置にある。

**図Ⅱ－２０　持てると思う子ども数の実現に当たっての問題点**
**（希望する子ども数と持てると思う子ども数が一致している者、複数、第二群）**



図Ⅱ－２１　持てると思う子ども数の実現に当たっての問題点
（希望する子ども数と持てると思う子ども数が一致している者、バブルチャート、複数、第二群）




（注）横軸は第１主成分、縦軸は第３主成分

## ３．高校生が考える結婚する理由、子どもを持つ理由の分析

### （１）結婚する理由の分析

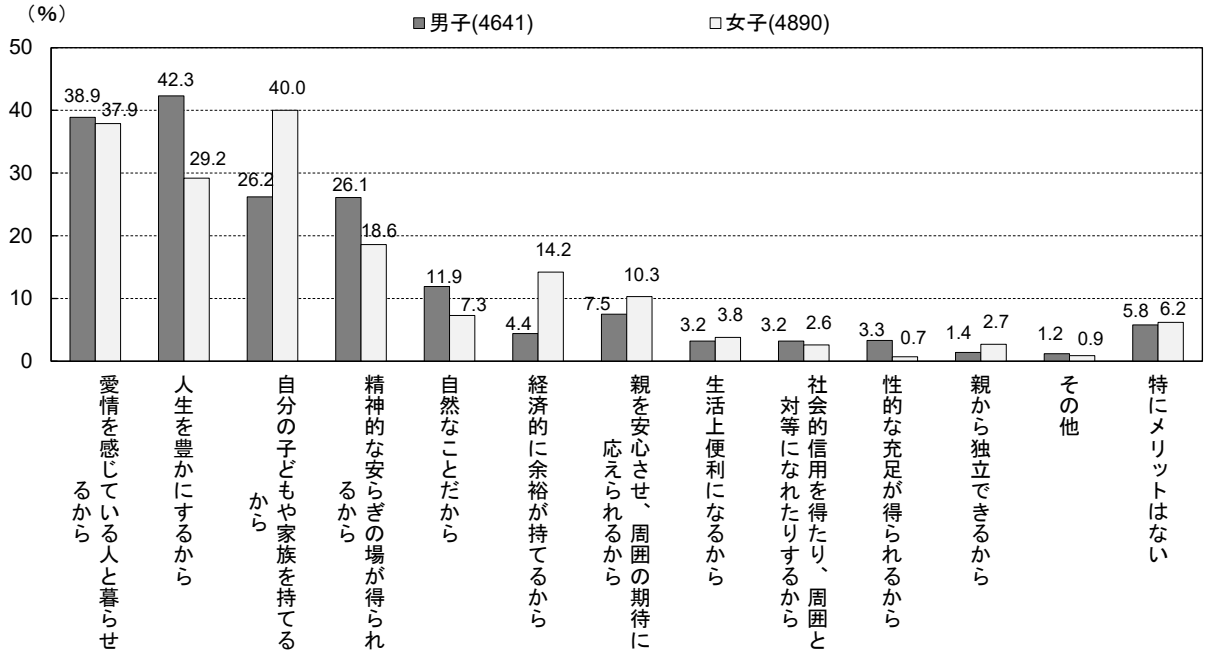
（結婚に対する考え方はおおよそ高校生の段階で形成されている）

高校生で最も回答が多い結婚したい理由や結婚のメリットは、男子では「人生を豊かにするから」（42%）、女子では「自分の子どもや家族を持てるから」（40%）である。女子は第一群と同じであるが、男子の回答は高校生の特徴になっている（図Ⅱ－２２）。「愛情を感じている人と暮らせるから」といった恋愛結婚につながる理由は第一群と同様に回答が多い。

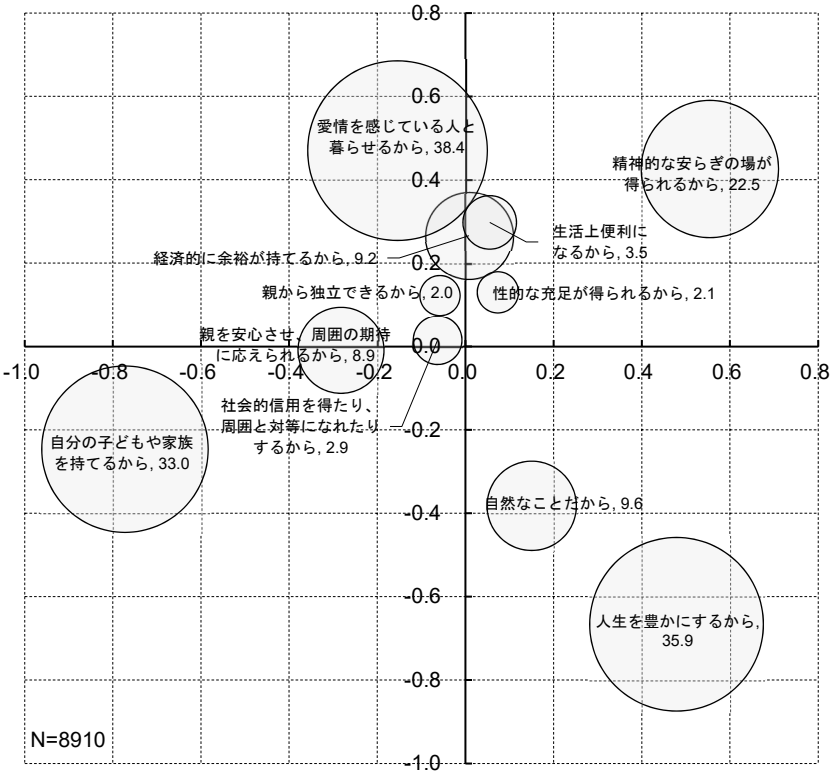
バブルチャートにすると、回答が多い「人生を豊かにするから」「自分の子どもや家族を持てるから」「愛情を感じている人と暮らせるから」等がそれぞれ離れた位置にあり、高校生の意見が分かれている様子が窺える（図Ⅱ－２３）。

次に、結婚したいとは思わない理由や結婚のデメリットを把握すると「特にデメリットはない」が男女とも20%台になっており、第一群と同程度になっている（図Ⅱ－２４）。一方、「家族を支える責任が生じ、気楽さが失われるから」「自分の生き方と結婚を両立できそうにないから」「金銭的な裕福さが失われるから」が理由の上位にあり、「結婚することを重視していないから」が20%前後に上る。これらは第一群とほぼ同じ結果である。こうした結婚に対する考え方が、高校生のときから形成され、年齢が高くなってもあまり変わっていないことは注目される。

図Ⅱ－２２　結婚したいと思う理由や結婚のメリット（複数、第三群）

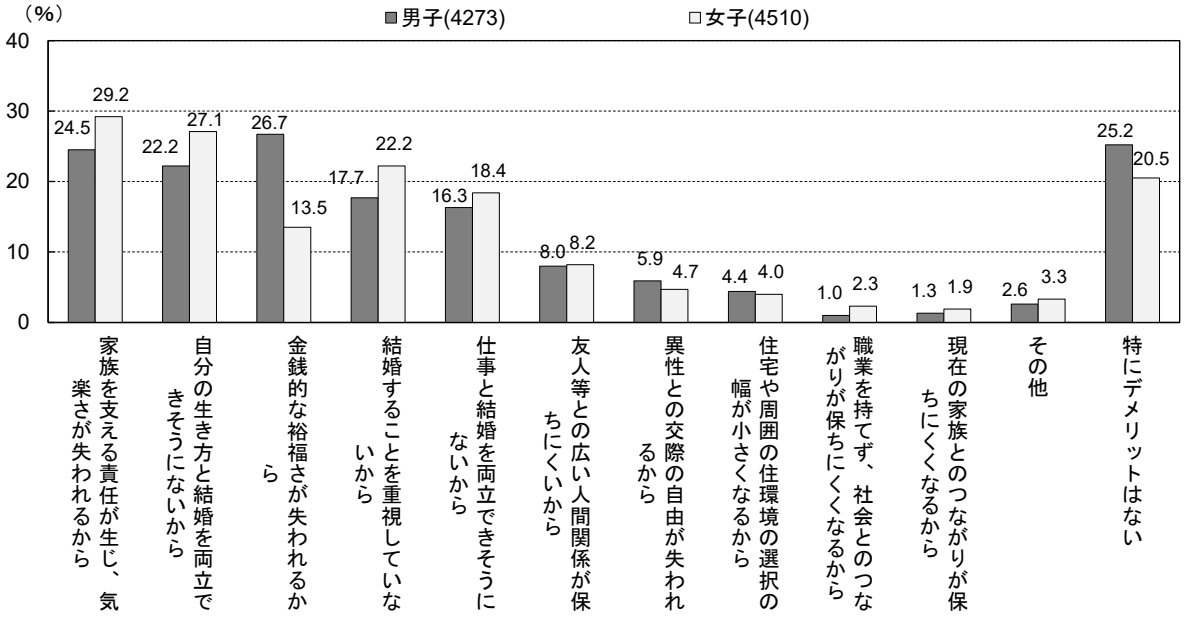


図Ⅱ－２３　高校生の結婚したい理由や結婚のメリット（バブルチャート、複数、第三群）



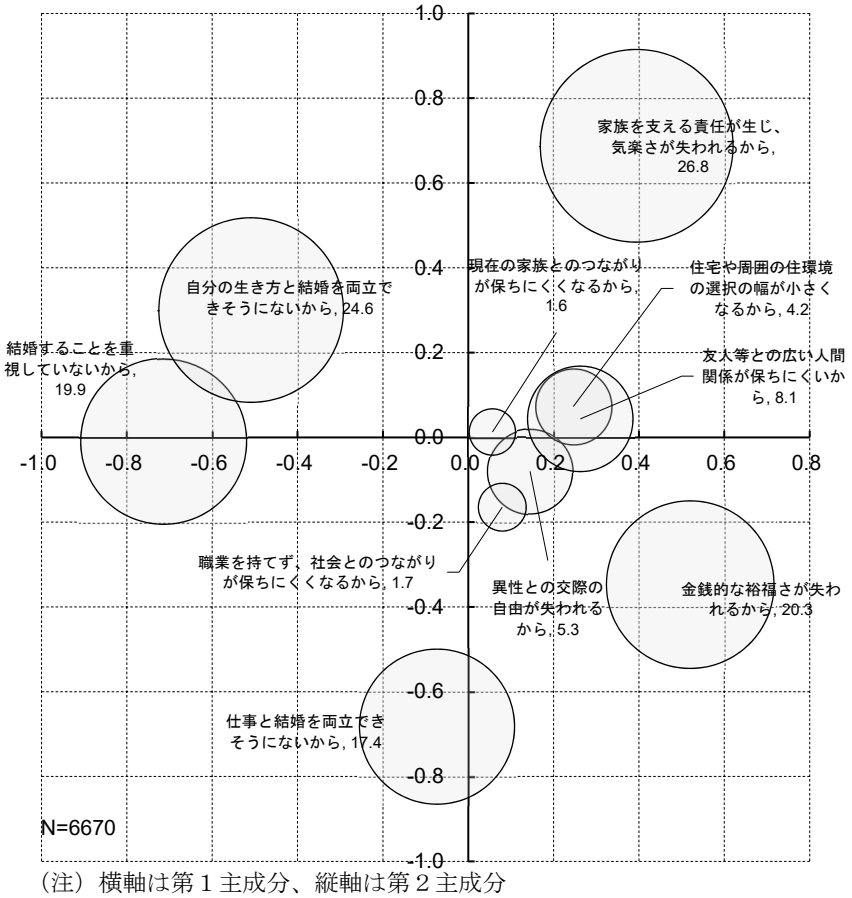

（注）横軸は第２主成分、縦軸は第３主成分

図Ⅱ－２４　結婚したいとは思わない理由や結婚のデメリット（複数、第三群）



バブルチャートに表すと、「自分の生き方と結婚を両立できそうにないから」と「結婚することを重視していないから」が隣接している。その他は、回答が多い「家族を支える責任が生じ、気楽さが失われるから」「金銭的な裕福さが失われるから」「仕事と結婚を両立できそうになりから」が、それぞれ分かれた位置にある（図Ⅱ－２５）。

**図Ⅱ－２５　高校生の結婚したいと思わない理由や結婚のデメリット**
**（バブルチャート、複数、第三群）**




（注）横軸は第１主成分、縦軸は第２主成分

## （２）理想の結婚年齢がある理由の分析

### （「子どもを持つことを想定する自分や配偶者の年齢」は多いとみるべきか）

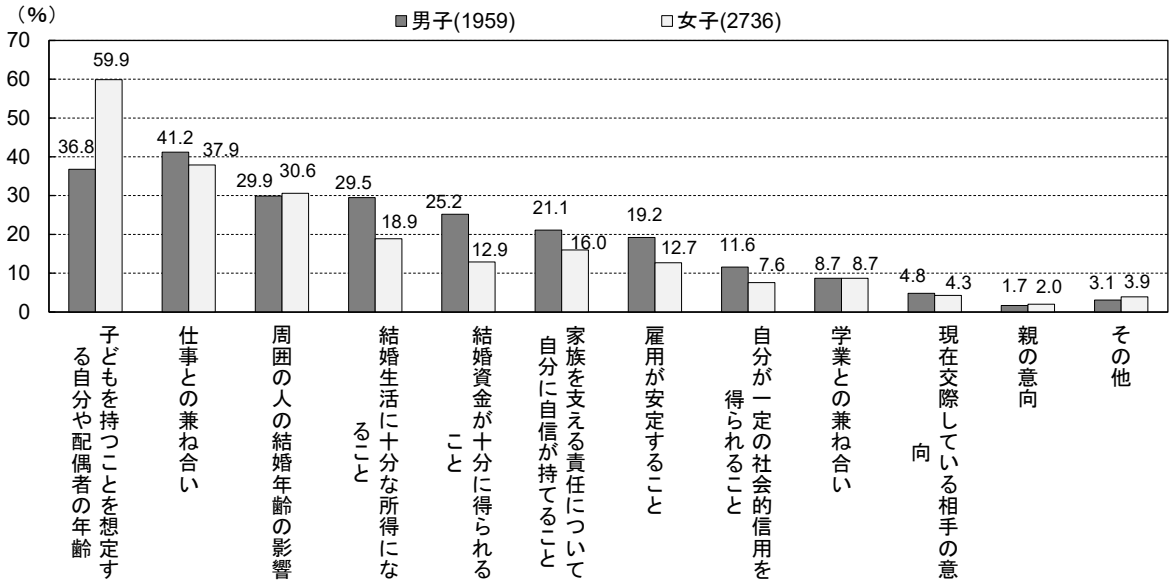
理想の結婚年齢がある理由は、「子どもを持つことを想定する自分や配偶者の年齢」が女子で60％に上る。第一群（75％）ほどではないものの、女性の回答が集中する傾向がみられる（図Ⅱ－２６）。後の分析でみるとおり、第１子を持つ年齢に理想を持つ女性は多く、そのことは希望する子ども数やその実現と強く結びついている。これを踏まえると、たしかに女子では「子どもを持つことを想定する自分や配偶者の年齢」の回答が最も多いものの、60％では十分に回答率が高いとは言えない可能性がある。男子では37％にとどまっている。

次に男女とも回答が多いのは「仕事との兼ね合い」であり、結婚、その後の出産・子育てと、仕事との両立の問題と考えられる。また、「周囲の人の結婚年齢の影響」も約 30％に上り、第一

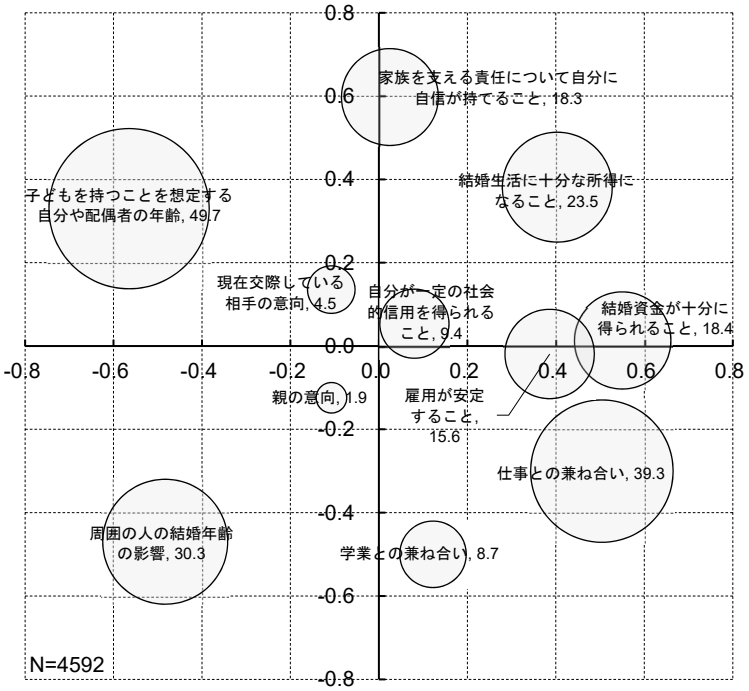
群でもみられた「ネットワーク効果」が高校生でも認められる。

バブルチャートは第一群に比べてばらつきが大きいが、類似点もみられる（図Ⅱ－２７）。特に、左右でみて、「子どもを持つことを想定する自分や配偶者の年齢」「周囲の人の結婚年齢の影響」等が横軸の左側にあり、その反対側に「仕事との兼ね合い」「雇用が安定すること」「結婚資金が十分に得られること」等が位置しているところは第一群と同じである。

図Ⅱ－２６　理想とする結婚年齢がある理由（複数、第三群）




図Ⅱ－２７　高校生の理想とする結婚年齢がある理由
（結婚年齢に理想がある者、バブルチャート、複数、第三群）




（注）横軸は第１主成分、縦軸は第２主成分

### （３）結婚希望が実現できない理由の分析

**（「結婚したい相手と出会いそうにない」を中心に自信のなさや交際の苦手意識がまとまる）**

「理想の年齢よりも遅くなりそう」と「結婚できないかもしれない」といった結婚の希望が実現できない理由を高校生を対象に把握した。

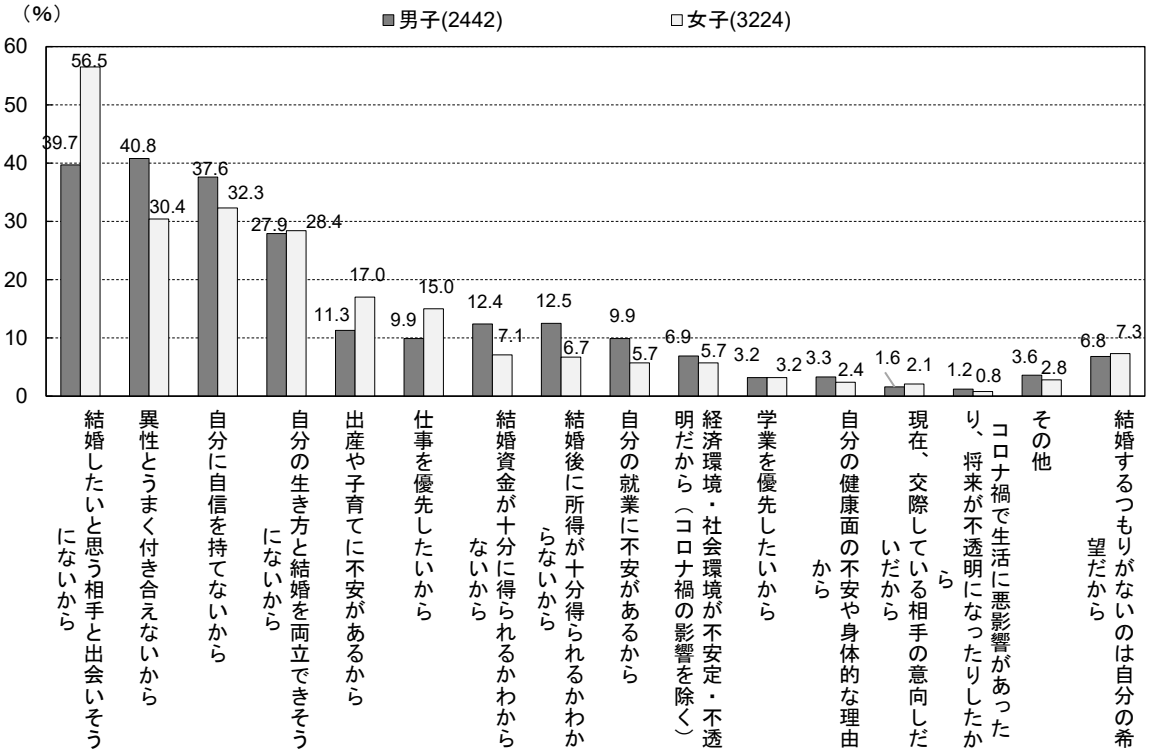
男女とも「結婚したいと思う相手と出会いそうにないから」が多いが、男子が 40%であるのに対して女子は 57%に上る（図Ⅱ－２８）。第一群では女性の回答が男性をやや上回る程度であったが、高校生では男女の差が大きい。これと対をなすように、「異性とうまく付き合えないから」「自分に自信を持てないから」は男子の方が多い。第一群でも同様であり、この傾向は高校生のときからみられる。

これらの理由に続いて「自分の生き方と結婚を両立できそうにないから」が男女とも 28%に上り、回答が多い。第一群では男女ともに 18%程度であり、高校生の方が約 10 ポイント多い。これが、世代効果である場合は、今後、出生率の低下に影響する可能性が考えられる。

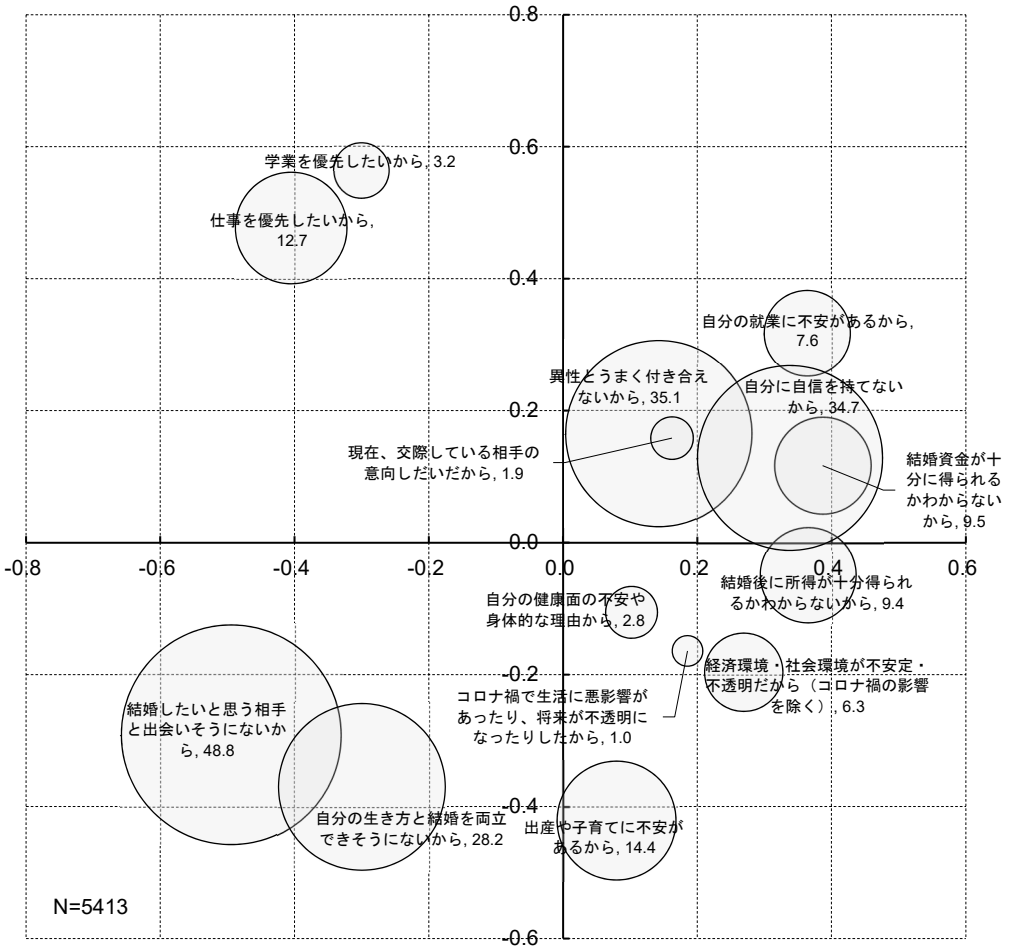
バブルチャートにすると、第一群と同様に「異性とうまく付き合えないから」と「自分に自信を持てないから」が隣接しているが、その割合が大きい。これらに、結婚資金や結婚後の所得、就業の不安が一緒になってまとまりを形成している（図Ⅱ－２９）。

これらと対称的な位置に、「結婚したいと思う相手と出会いそうにないから」と「自分の生き方と結婚を両立できそうにないから」がまとまりを成している。結婚したい相手と自分の生き方が関わり合っていることがわかる。

**図Ⅱ－２８　「理想の年齢よりも遅くなりそう」「結婚できないかもしれない」「結婚するつもりはない」と思う理由（複数、第三群）**



図Ⅱ－２９　高校生の結婚希望が実現できない理由（理想の年齢よりも遅くなりそう、結婚できそうにない、結婚するつもりはない」と回答した者、バブルチャート、複数、第三群）




（注）横軸は第２主成分、縦軸は第３主成分

### （４）子どもが欲しいと思う理由の分析

**（子どもを持つことの自然さなど第一群とは異なる点がみられる）**

高校生が子どもが欲しいと思う理由は、回答の多さの順序はほぼ第一群と同じである（図Ⅱ－３０）。しかし、回答の多い「生活が楽しく心が豊かになるから」と「子どもが好きだから」など、回答割合の大きさそのものには第一群と異なる点がみられる。

高校生の「生活が楽しく心が豊かになるから」は 60%を超えており、第一群に比べて 10 ポイント程度多い。次いで、「子どもが好きだから」が特に女子では 55%に上り、男子でも 45%の回答がある。これも第一群よりも 20 ポイント近く回答が多い。

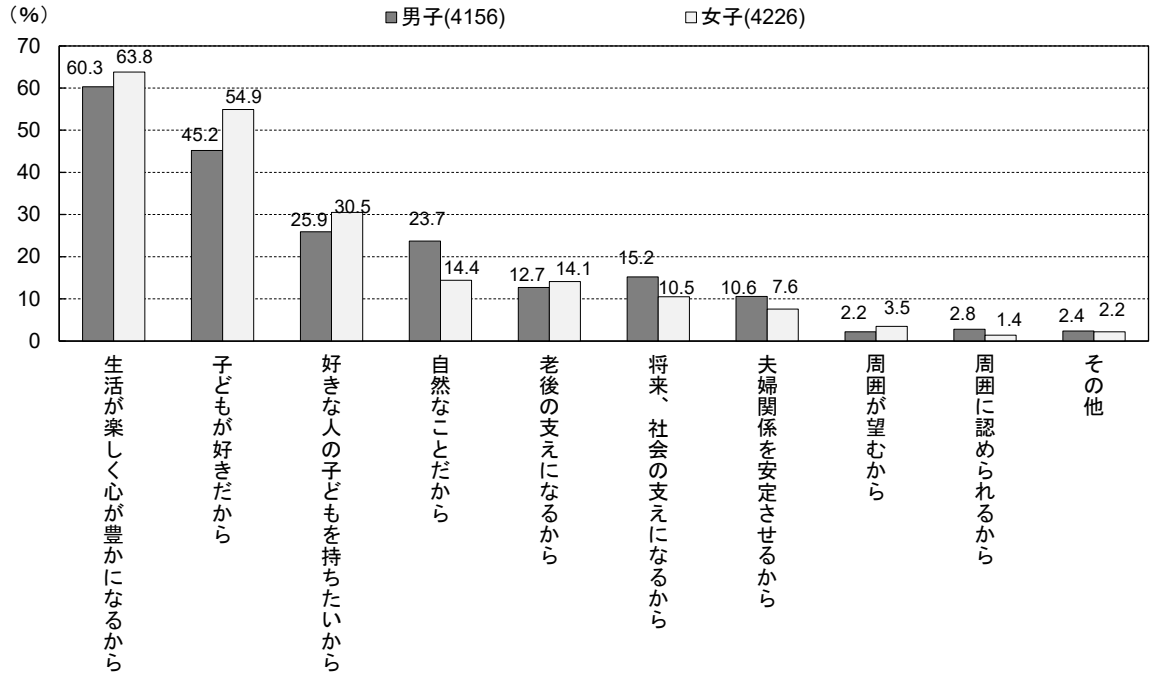
逆に「自然なことだから」は第一群では男女とも 30%を超えているが、高校生の女子では 14%にとどまっている。

これらの差異が、年齢効果であるのか、それとも世代効果であるのか判別はできない。しかし、もし世代効果であるなら、今後、結婚や子どもを持つことに対して意識面から後押しする施策に影響する可能性が考えられる。

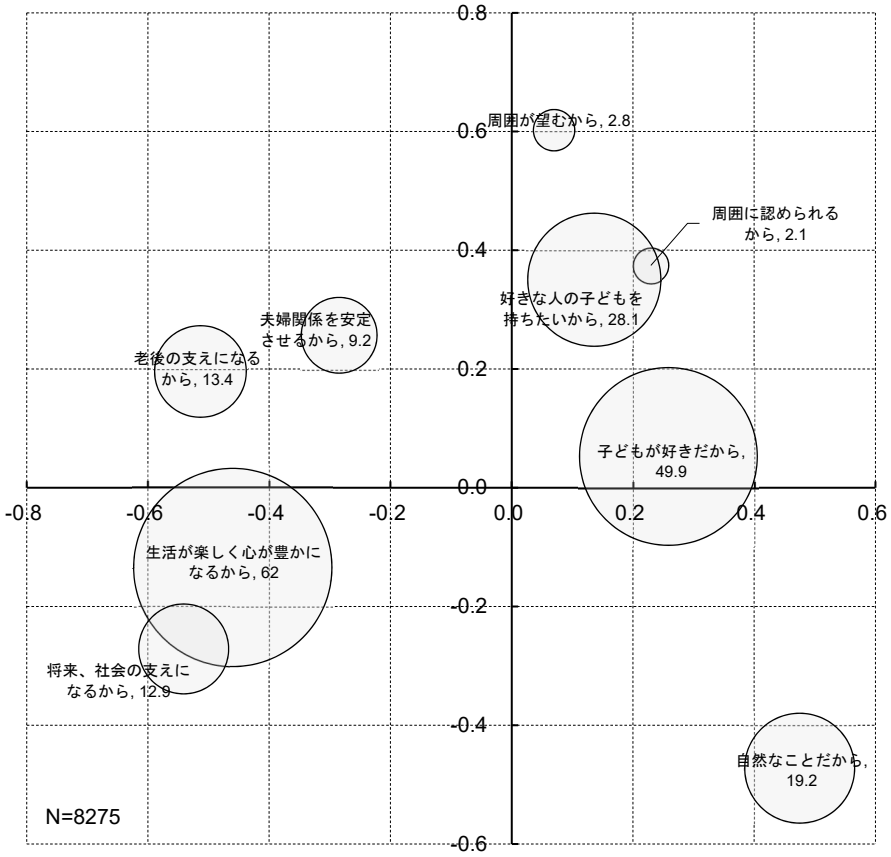
バブルチャートにすると、回答が多かった「生活が楽しく心が豊かになるから」と「子どもが好きだから」の間には距離があり、回答者の傾向が異なると考えられる（図Ⅱ－３１）。前者は、「夫婦関係を安定させるから」「老後の支えになるから」といった、どちらかと言えば実利的な理由との距離が近い。後者は「好きな人の子どもを持ちたいから」と近く、子どもや夫婦関係に対する感じ方を表していると考えられる。

第一群と差があった「自然なことだから」は、上の理由とは離れた位置にあり、子どもを持つことに自然さを感じる者は独自性が高い傾向にあるとみられる。

**図Ⅱ－３０　子どもが欲しいと思う理由（複数、第三群）**



図Ⅱ－３１　子どもが欲しいと思う理由
（子どもを欲しいと思う者、バブルチャート、複数、第三群）




（注）横軸は第２主成分、縦軸は第３主成分

## （５）子どもが欲しくない理由の分析

**（高校生の意識からも少子化問題が複合的であることがわかる）**

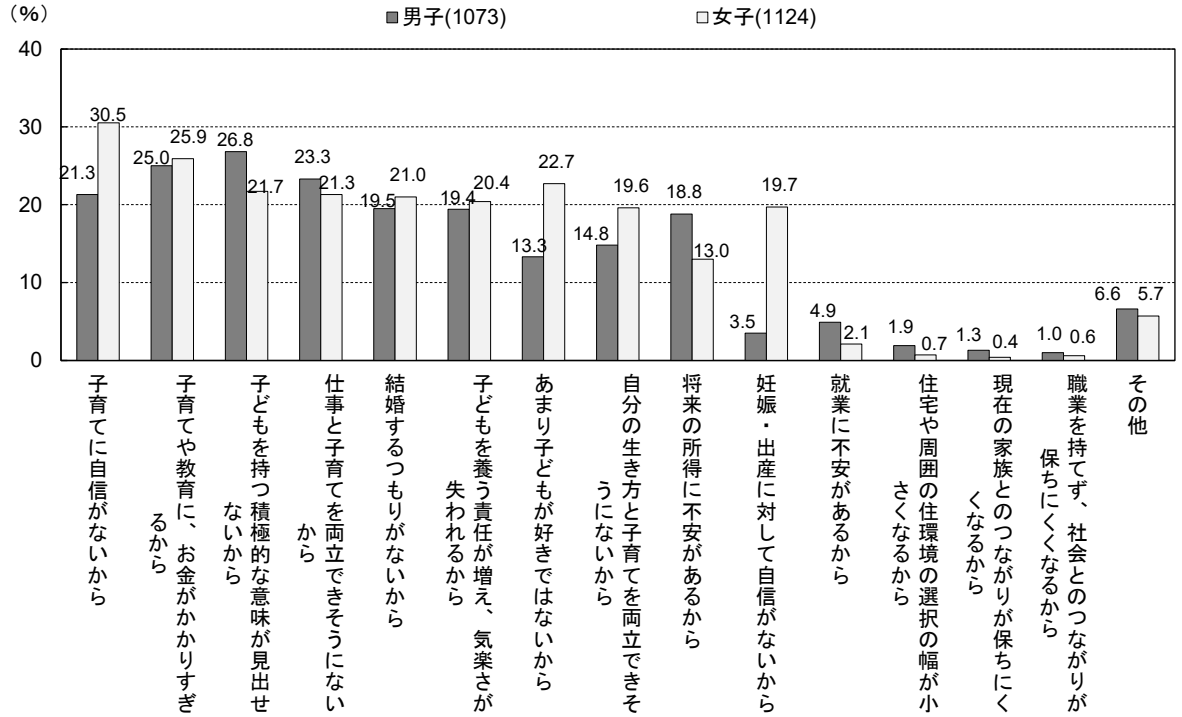
高校生の子どもが欲しくない理由や、子どもが欲しいとしても１人である理由を把握した。その特徴は回答が集中する理由がなく、回答がばらついていることである（図Ⅱ－３２）。男子では「子どもを持つ積極的な意味が見出せないから」が最も多いが、それでも27%である。女子は「子育てに自信ががないから」が最も多く、31%になっている。

バブルチャートに表すと回答の状況がいくらか明瞭になる（図Ⅱ－３３）。縦軸の上方では、「子どもを養う責任が増え、気楽さが失われるから」と「子育てや教育にお金がかかりすぎるから」が隣接している。「あまり子どもが好きではないから」という感じ方も近い位置あり、まとまりができている。

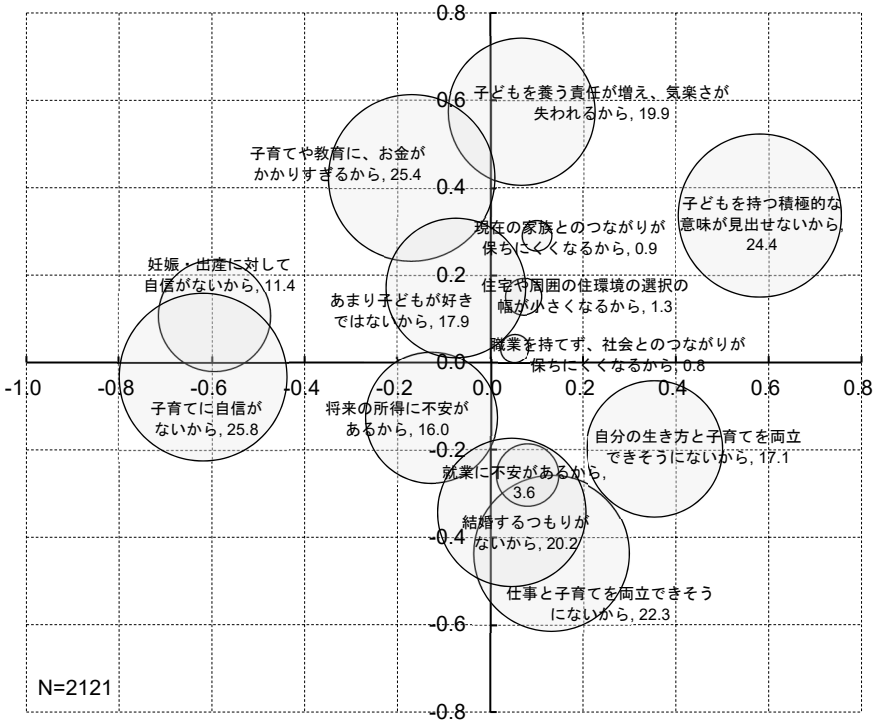
次に、「仕事と子育てを両立できそうにないから」と「自分の生き方と子育てを両立できそうにないから」が比較的近い位置にあり、「両立」が高校生にとっても問題になっている。これらと、就業や所得の不安が重なっている。また、そもそも「結婚するつもりがない」が両立の問題とまとまっており、高校生の結婚や子育てに対する否定的な意見は、所得や就業の不安と絡み合いつつ「両立」の難しさと関わりが深いと考えるれる。

これらの他では、「子どもを持つ積極的な意味が見出せないから」が横軸の右側に、「子育てに自信がないから」と「妊娠・出産に対して自信がないから」がまとまって横軸の左側に位置しており、大きく考え方の異なる者がいることがわかる。

**図Ⅱ－３２　子どもは欲しくない、希望する子どもの数が１人である理由（複数、第三群）**



図Ⅱ－３３　高校生の子どもは欲しくないまたは希望する子ども数が１人である理由
（子どもは欲しくないまたは希望する子ども数１人と回答した者、バブルチャート、複数、第三群）




（注）横軸は第２主成分、縦軸は第３主成分

## （６）希望する子ども数が実現できない理由の分析

### （高校生のときから経済的理由を挙げる者が最も多い）

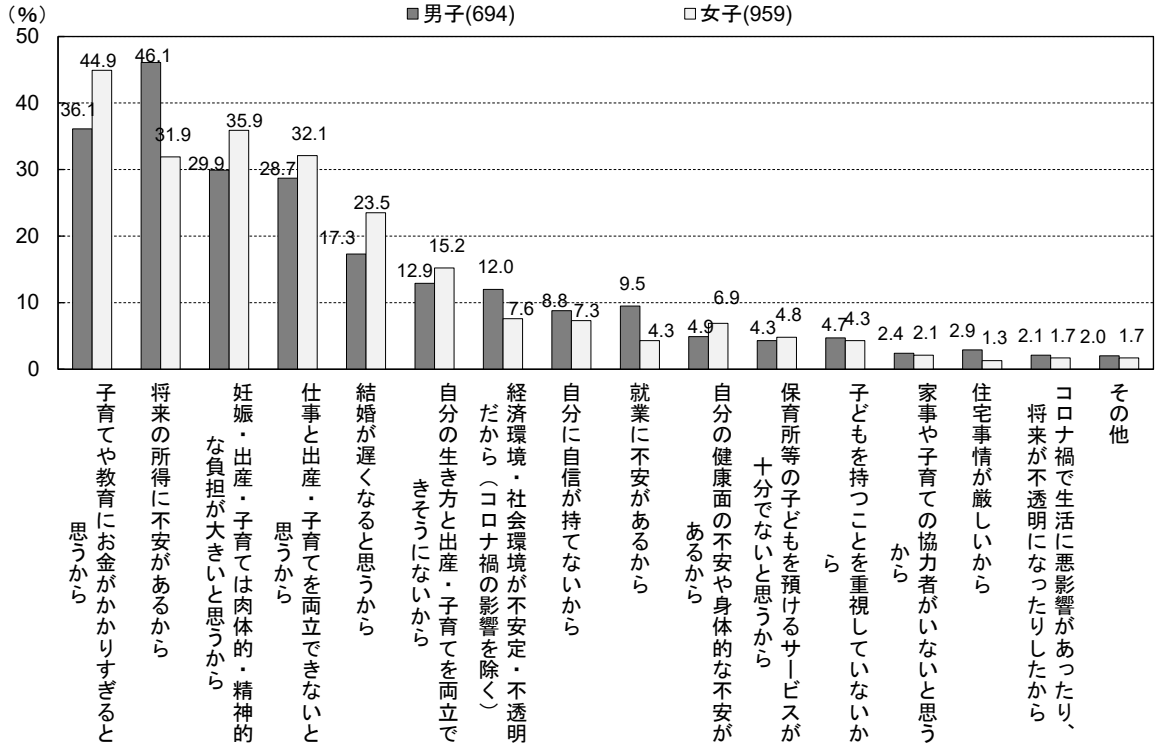
第一群と同様に、高校生に対して、希望する子ども数よりも現実に持てると思う子ども数が少ないと思う者に対して、その理由を尋ねた。

回答が多い理由は、女子では「子育てや教育にお金がかかりすぎるから」（45%）、男子では「将来の所得に不安があるから」（46%）といった経済面の問題が挙がっている（図Ⅱ－３４）。第一群では、これらの２つに回答が集中する傾向が強かったが、高校生では、女子の「妊娠・出産・子育ては肉体的・精神的な負担が大きいと思うから」（36%）、同じく女子の「仕事と出産・子育てを両立できないと思うから」（32%）も 30%を超えている。

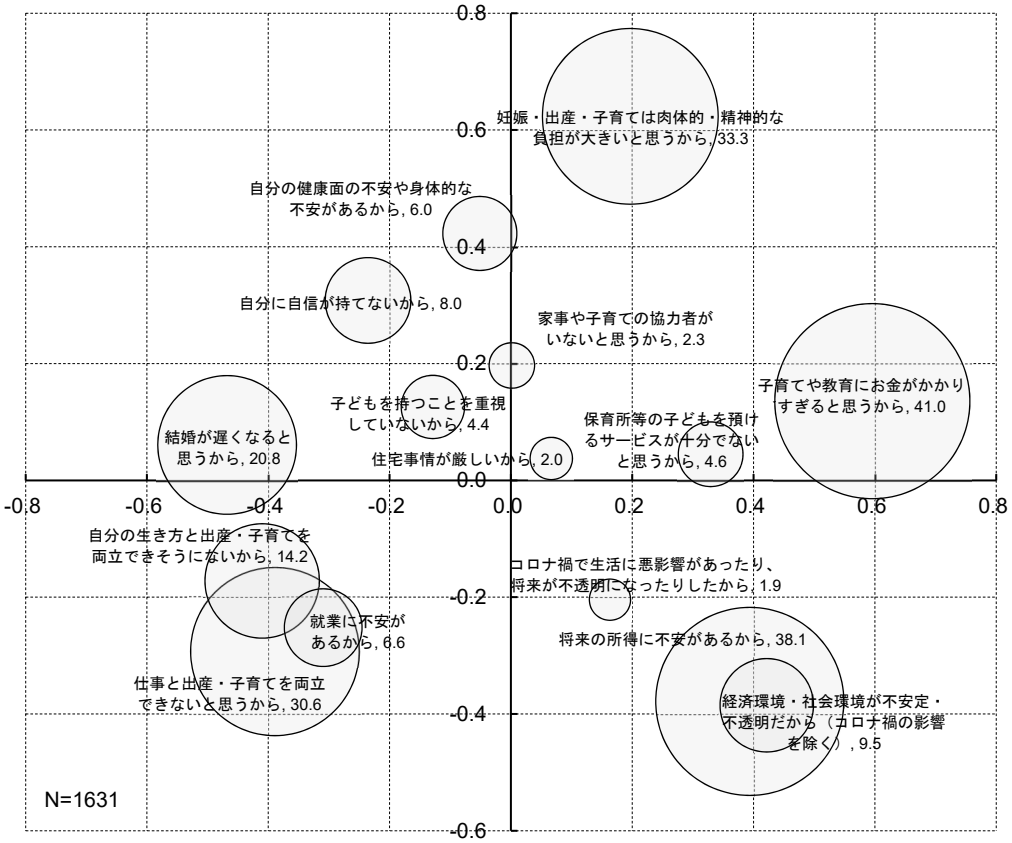
バブルチャートにすると、回答は大きく４つに分かれる。１つは「将来の所得に不安があるから」であり、これと「経済環境・社会環境が不安定・不透明だから」が重なっている（図Ⅱ－３５）。２番目は「子育てや教育にお金がかかりすぎると思うから」であり、横軸でみると、１つ目の理由と近く、経済的問題としてまとめることができる。３番目は、「妊娠・出産・子育ては肉体的・精神的な負担が大きいと思うから」であり、自分の健康面・身体的な不安が近い位置にある。

最後は、「仕事と出産・子育てを両立できないと思うから」を中心に、「自分の生き方と出産・子育てを両立できそうにないから」や「就業に不安があるから」がまとまりを形成し、「結婚が遅くなると思うから」も近い位置にある。「両立」は高校生にとっても予想される問題の１つになっている。

図Ⅱ－３４　「持てると思う子ども数」が「希望する子ども数」より少ない理由
（複数、第三群）




図Ⅱ－３５　高校生の持てると思う子ども数が希望する子ども数より少ない理由
（持てると思う子ども数が希望する子ども数より少ない者、バブルチャート、複数、第三群）




（注）横軸は第１主成分、縦軸は第２主成分

## ４．理由の分析のまとめ

第一群と第二群のバブルチャートで得た「理由のまとまり」を手掛かりにして、①結婚したい理由・子どもが欲しい理由（理想の結婚年齢がある理由を含む）、②希望が実現できない理由、③結婚しない理由・子どもが欲しくない理由の３つに分けて、キーワードを整理した（表Ⅱ－１）。

第Ⅳ章において要因分析を進めるに当たって、全県のデータを対象に、分野ごとに質問間の因果関係の可能性を検証するが、表Ⅱ－１に挙げたキーワードは、その分野分けの妥当性に対して根拠を提供できる。

**表Ⅱ－１　理由の分析のまとめ**

| 区分 | ①結婚したい理由・子どもが欲しい理由（理想の結婚年齢がある理由を含む） | ②希望が実現できない理由 | ③結婚しない理由・子どもが欲しくない理由 |
|---|---|---|---|
| 結婚 | ◎肯定的な家族観<br>◎子どもを持つ年齢<br>◎周囲からの影響<br>○結婚の自然さ<br>○実利的な効用<br>○仕事との兼ね合い | ◎出会いの機会の不足<br>○経済問題<br>○生き方・仕事との両立への不安<br>○自分への肯定的意識の低さ<br>○結婚・子育てに対する不安<br>○経済環境・社会環境の不安定化・不透明化・ | ◎結婚による生きにくさ<br>○関係性の自由度の重視<br>○仕事との両立の難しさ |
| 子ども | ◎実利的な効用<br>◎肯定的な子ども観<br>◎子ども持つ自然さ | ◎経済問題<br>◎肉体的・精神的負担<br>○生き方・仕事との両立への不安<br>○晩婚<br>○経済環境・社会環境の不安定化・不透明化 | ◎経済問題（仕事との両立を含む）<br>◎子どもを持つことによる生きにくさ<br>◎子育てに対する自信のなさ<br>○否定的な結婚観・子ども観 |

（注）◎はおよそ 20%を超える回答が多くまとまった理由、○はおよそ 10%から 20%の回答がまとまった理由である

### ①結婚したい理由・子どもが欲しい理由（理想の結婚年齢がある理由を含む）

表Ⅱ－１の①では、結婚や子どもを持つ希望は、それらへの肯定的な価値観・感じ方が大きな理由となっている。「自分の家族を持つ」「愛情を感じる人と暮らす」といった家族観、「子どもが好き」「好きな人の子どもを持つ」といった子どもに対する感じ方である。

一方、結婚における「精神的な安らぎが得られる」「経済的に余裕が持てる」、子どもを持つことにおける「生活が楽しく心が豊かになる」「老後の支えになる」といった実利的理由を選択する回答が一定数ある。なお、実利的理由を選択する者は、上述の結婚や子どもそのものに対する肯定的感じ方を持つ者とは異なる傾向がみられる。

また、結婚や子どもを持つことを自然なこととして受け入れる感覚は、上の２つとも回答者が違っている。いずれにせよ、これらは県民の「希望」であり、その希望を後押しする施策は受け入れられる可能性がある。しかし、上の３つのどれに重点を置くかは慎重に検討する必要があると考えられる。

**②希望が実現できない理由**

結婚の希望が実現できない理由は、「相手と出会いそうにないから」が大きい。これと同時に、自分に対する自信のなさや異性と付き合うことの苦手意識を回答する傾向がみられる。所得や雇用の不安といった経済問題や、結婚してからの生き方や仕事との両立を不安視していることも無視できないが、「相手と出会いそうにないから」の回答の多さは際立っている。

一方、子どもの数に対する希望に対しては、経済問題が大きな支障になっている。所得、雇用の不安に加え、養育費・教育費の負担の大きさもある。結婚後に子どもが生まれることを想定すると、経済問題は、結婚の希望が実現できない間接的な理由になっていると考えられる。また、妊娠・出産・子育ての肉体的・精神的な負担も大きな理由になっている。これは、第Ⅲ章で詳細に分析を行うが、理想の結婚年齢が実現できないなどの理由によって晩婚となった者に多いと考えられる。こちらは、結婚希望の実現が子どもを持つ希望の実現に影響を及ぼしている。これらは、結婚と子どもを持つことが希望の実現レベルで結び付いている例である。

**③結婚しない理由・子どもが欲しくない理由**

結婚しない理由や結婚のデメリットとして大きいのは「気楽さが失われる」「生き方と両立できない」「金銭的なゆとりがなくなる」などであり、これらを結婚による「生きにくさ」と表現した。また、人間関係の自由度に対する志向から結婚を重視しない層もみられる。「仕事と結婚を両立できない」を除けば、価値観の問題という性格が強く、施策による直接的な介入が難しいが、こうした価値観・感じ方の拡大について注視する必要がある。

子どもが欲しくない理由は、上と同様の意見（気楽さが失われる、生き方と両立できない）と、「子どもが好きでない」「子どもを持つことに意味が見い出せない」といった否定的な価値観・感じ方がひとまとまりになっており、これらも施策の介入が難しいと考えられる。

一方、経済問題は、価値観、感じ方以上の割合となっており、効果的な施策の検討が必要になっている。また、「子育てに対する自信がない」の回答者には効果的なサポートが検討できる可能性がある。

**（コロナ禍の影響について）**

結婚や子ども数の希望を実現できない理由を把握する質問では、「コロナ禍で生活に悪影響があったり、将来が不透明になったりしたから」を選択肢に加えた。しかしながら、すべての質問で回答は２％から３％程度であった。

コロナ禍は、結婚や妊娠の先送りでここ数年の出生率低下の要因になったと報告されているものの、中長期的な視野に立った希望やその実現に対しては、ほとんど影響を及ぼしていないと考えられる。それよりも、コロナ禍の影響を除く経済環境・社会環境の不安定化・不透明化の方が影響は大きく、５％から10％程度の回答がみられた。